404小隊(チビ)は現実へと現れる【完結】

畑渚

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ってのはまあ普通の大学生って言っていい生活を送っていたんだが、
夏休みの初日によくわからないことになってな
今年の夏休みは、一味違ったものになりそうな予感がするぜ……胃薬を用意しておこう

ｐｉｘｉｖにも同名で連載しています。

目次

第一話　夢の始まり ―――― 1
第二話　もう逃げられないゾ♡ ―― 9
第三話　夢が覚めるまで ―――― 17
第四話　誰だろう？答えはわかっているけれど ―――― 24
第五話　お買いもの ―――― 33
第六話　どうしてこうなったんだっけ!? ―――― 42
第七話　まあ、そうだよね！ ―――― 50
第八話　残念だが、俺にも無理だ 58
第九話　目標目前！突撃い！ ―――― 65
第十話　特別編　本当に……？ ―― 76
第十一話　これが布団の力 ―――― 84
第十二話　俺の勝ち（プルプル） 91
第十三話　想像通りだ ―――― 99
第十四話　こっちを見るその目は何？ 107
第十五話　容量よ、持ってくれ ―― 114
第十六話　あと数本手があったらなぁ 121
第十七話　俺が起きとかないとな…… 128
第十八話　こんなに広かったかな

第十九話　無意識って怖い　――　143
第二十話　特別編　別に惚れたってわけじゃないんだからね　――　151
第２１話　こりゃ長引きそうだ　――　172
第２２話　我慢も身体に毒　――　179
第２３話　やわらか低反発枕　――　186
第２４話　転ばぬ先の　――　193
第２５話　寿司食いてえ　――　200
第２６話　泳ぐ寿司　――　207
第２７話　ありがとう　――　213
第２８話　早めのおやすみ　――　220
第２９話　知らないもの　――　226
第３０話　特別編　まったく……　232

第一話　夢の始まり

なぜそう思ったかのはわからない。
ただそう……なんとなく公園に行こうと思ったのが発端だった。
だがどうして……
どうして俺の隣に子供が？

「ねえねえおじさん！これってどう遊ぶの!?」
右手の方には俺のスマホでゲームをする明るい茶髪の女の子がいる。無邪気な笑顔でゲームをプレイする様子は、あたりを通る諸兄姉たちまでを笑顔にする。
左手の方には暗めの茶髪の女の子が、うさぎの人形を抱えて静かに座っている。あたりを通る諸兄姉はその少女に庇護欲すら抱いていく。
そして、その諸兄姉たちはなぜこんなやつが少女を2人侍らせているのだろうと疑問の表情を俺に向けてくる。
声を大にして言いたい。なぜこうなったかを一番疑問に抱いてるのは俺自身だと

……

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

俺の今年の夏休み初日は、珍しく何も予定がなかったはずだった。バイトはもちろん、友人や家族との約束も入れていなかった。昨夜は1人で宴をして、呑んだくれたあとがまだ残っている。

冷房もガンガンにかけて気持ちよく寝ていたところ、インターホンの爆音が俺の耳に刺さる。

「なんだ……荷物なんて頼んでないぞ?」

訝しみながらモニターの前に行くと、そこには訪問者の姿が映し出されている。

「……なんだ、間違いか」

そこには2人の幼女が背を伸ばしてカメラを覗き込んでいた。

「はぁ……ついてないなぁ。寝なおそう」

横になれば、眠気はすぐにやってくる。意識はすぐに薄れていった。

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン……

＝＊＝＊＝＊＝

目を覚ませば、昼をすぎていた。とりあえず起き上がって背伸びをする。なにやら途中眠りを妨げる何かがあった気もするが、きっと気の所為だろう。

「げっ何もねえ」

冷蔵庫を開けても、本当になにもない。少ししか使っていない調味料が端の方でひっそり自己主張しているくらいである。

「しょうがない、どこかに買いに行くか……」

とりあえず適当なズボンとTシャツを着て、顔を冷水で流してから外へとでる。
「あっつ……」
昨日の雨のせいか、やたらと湿度が高い。せっかくの晴天をすべて台無しにしている。
とりあえず、近くのスーパーまで歩いていくことにした。

「いらっしゃいませ～」
やる気のない店員の声が俺を癒やす。褒められた態度でないだろうが、俺はこのくらいが好きだ。適当にカゴにポンポンと商品をいれ、レジへと通す。
「ありがとうございました～」
「はい、どうも」
支払いを終えて、商品をうけとる。外に出れば、またもや灼熱の世界だ。
「まったく……どうしてこんなに暑いんだ……」
温暖化だとかそんなもんじゃ断じてない。ただただ、この日、この地域が暑いだけだ。
「汗がうざったいな……」
確かちょうどすぐ側に公園があったはずだ。木陰で休憩していこう。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

近くの自販機でスポドリを買って喉に流し込む。やっぱりこういう日には冷えたスポドリが一番だ。炭酸っていうのも理解はできるが、俺はこっち派だ。

ベンチに座り込み、スマホを取り出す。通知欄からゲームを起動させ、いつもどおりに操作する。

『ドールズフロントライン』

それがこのゲームの名前だ。一年と少しくらい前だったか……、サービス開始の広告を見て飛びついたものだ。

『おはよう指揮官！今日もなにかあったら言ってよね！』

設定されたキャラが、設定されたボイスを話すだけだ。それでもなんとなく気分はいい。副官をなんどもタップする。

『何をするんですか指揮官！まだそういう関係じゃないでしょう！』

この言葉になんど顔を緩めただろうか。さすがに今は外だから表情は変えないが、心の中ではニンマリと笑顔になる。

「ねえ、今日は何を食べるの？」

ん？そんなボイスが実装されていた覚えはない。そもそも支離滅裂だし、副官はホーム画面のボイスでは全部『指揮官！』と俺のことを呼ぶ。だがしかし、俺が推しの声を聞き間違えるはずがない……。

他のやつが別のゲームでもやっているのかと顔をあげると、笑顔でスーパーの袋を覗いている少女が目に入る。その声は先程聞いていたものと同じだ。百人に聞いて百人が同一人物だと答えるはずだ。

そしてその容姿は……今の俺のゲーム画面からはかけ離れていた。小さい背丈、子供服、柴犬のお面、俺の副官の重苦しい装備はそこにはない。

しかし、それは見覚えがある。たしか中国版で実装された子供の日スキンとやらで、それと寸分違わぬ容姿を、俺の推しはすることになる。

「ちょっと9、走って行かないでよ……」

「45姉ごめん！でも我慢できなくて」

エヘヘと9は笑う。それにくらべ45は拗ねているのかほっぺを膨らましている。

「えっと……君たちは？」

「あれ？ああそっか、自己紹介してなかったね。私はUMP9！」

「私はＵＭＰ４５」
「ちょっと君たち、どこで見たのか知らないけどお兄さんをからかっているのか？」
本気で自分が心配になってきた。話しかけてきた幼女が推しの姉妹に見えるだとか白昼夢にもほどがある。早くも熱中症になったのかも知れない……。
「あー信じてない！」
「ひどい……うぅ」
「ああ待って！泣かないでくれ！ほら！えっと……」
４５の瞳が潤んでいく。さすがにそれなりに人通りのあるこの公園で幼女を泣かせたと鳴っては、嫌な意味で有名になってしまう。
俺は急いでスーパーの袋を開くと、アイスの袋を引っ張り出す。数十分前の俺、グッジョブだ……。
……帰りにコンビニで買い足して帰ろう。

「えっ？いいの！ほら４５姉！」
９は某ＰＡＰＩＣ●を受け取ると、４５と半分にわける。そして上の部分をちぎり、しばらく迷った様子を見せる。
「ど、どうした？」

「え、えっとね……これあげる！少ないけど……お礼！」
そういって９はＰＡＰＩＣ●の上の部分を差し出してくる。少しだけアイスが入っている。これが優しさというものだろうか……。
「わ、私も……」
４５も同じように手渡してくる。両手にその小さいアイスを抱えたおれは、身動きができなくなってしまった。
「よし、それじゃあ元気に遊ぶんだぞ～」
外向きの笑顔を繕って幼女達を送り出そうとする。
しかし、子供だしすぐに去っていく……なんてことあるわけがなかった。
「うん、ありがとう！」
９は右手側に、４５もスーパーの袋越しに左手側に座る。
「スマホで何見てたの？」
９が身を寄せてスマホの画面を覗き込んできた。９の腕が俺の腕にあたる。
暑い夏の幼女の身体は、どこかひんやりとした冷たさも持っていた。

第二話　もう逃げられないゾ♡

「これってどうするの？」
「ああ、これはね？」
　９は俺の右側でスマホをいじっている。推しキャラを操作している推しとかいうよくわからない状況に、俺の頭は完全にオーバーフローをおこしている。
「あの、えっと……」
「ああお腹が空いたのか、これ食べるかい？」
「……！ありがとう」
　左横には４５がうさぎのぬいぐるみを抱きながらすわっている。お腹をおさえていたのでお菓子を与えてみれば、小さい口を一生懸命に動かしながら食べ続けている。
「さて、俺はそろそろ帰るけど……」
「うんわかった！」
　そういって９はスマホを返してくれる。４５もベンチから立ち上がって、お尻に付いた土埃をはたいて落とす。
「そ、それじゃあ元気でな」

「うん、ばいば～い」
９は元気に手を振って見送ってくれる。４５も人形を持ってない方の手を小さく振ってくれていた。
まったく、推しのキャラのそっくりさんに会えるなんて、おれは随分と幸せな人間みたいだ。日頃の行いには今後も気をつけていこうなんて思っていた。

しばらく歩いたあとだった。なんだか周りの目線がむず痒い。俺自身を見られているわけではないが、少なくとも一度は注視されているみたいだった。ひどい人は俺の顔を二度見してくる。別に俺がイケメンであれば話は違うのだが、顔面偏差値は残念ながら平均以下だ。
しかし、確実にすれちがった人は俺の顔を一度か二度、驚いた様子で見てくる。

不思議に思いながらも歩いていると、ガラス張りの店の前で信号にひっかかる。適当にスマホでもいじって時間をつぶしていると、ふと突然視界に見覚えのあるお面が目に入った。
驚いてその方向……つまりは店のガラス窓を見る。そこには驚いた表情を浮かべる俺と、当たり前のように後ろにいるＵＭＰ姉妹が映っていた。２人ともご機嫌な様子

で、まるでイタズラが成功したかのような笑い方をしている。
「あれ？どうしてここに」
「だって私たちもこっちに帰るから」
「へえ、そうか」
まあ変な人についていくよりかは、自他共に認める絶食系男子の俺についてくる方がいいのかも知れない。
「そうか、それじゃあ途中まで一緒に行こうか」
「うん！」
９は元気よく声を出しながら返事をする。４５もコクリと首を縦に振る。
「えへへ」
「随分と楽しそうだね」
「だってお兄さんと会えたんだもん」
エへへと９ははにかんだように笑う。かわいい、俺の推しがかわいい。たとえ子供になってようが本質は変わってなくてかわいい。
「うん……私もうれしいよ？」
推しの姉がかわいい。推しと似た容姿をしているくせに性格が全然違ってかわいい。全軍人が銃を投げ捨てるレベルでかわいい。

その２人が合わさることでかわいさの相乗効果をおこし、いずれ地球を２人のかわいさが満たすんだ。もう誰にも抗えない。世界はＵＭＰ姉妹のかわいさに包まれ……

「……さん？ちょっとお兄さん!?」

「っとごめんごめん、少し考えごとをしていたよ」

いかんいかん、あまりのかわいさに浄化されて昇天してしまうところだった。

「それで、君たちの家はまだ先なの？」

「うん！だからまだ一緒にいられるね！」

「うん、一緒……」

そうか……。まあ確かにここは住宅街だし、アパートもたくさんある。まったくあったことが無くても、不思議じゃない。

……いや待ってくれ。推しがゲームの世界からここの世界に来た可能性？あるわけがないだろう。きっと暑さで頭をやられているんだよ。そう、幼女２人を推しの姉妹に幻視している俺と同じくらいにね。水分はしっかりとることをおすすめするよ。塩分もわすれずにね。

「君たちもこっちなのかい？」

「うん」

もうすぐ家に着くけれど、まだ姉妹は俺のあとに続いてテクテクとあるいている。歩

調を2人に合わせているせいか、いつも以上に家が遠く感じていた。
「えっと……もしかしてこの建物かい？」
「えへへ、そうだよ」
結局2人は俺の住んでいアパートの目の前までついてきていた。
「へえ、奇遇だね」
「そうだね～」
9はヘラヘラと、45もクスクスと笑う。
「何階かな？」
俺は二階に住んでいるから普段は階段を使っているが、2人は違うだろう。同じ階の住人くらいは把握しているし、そもそも子供2人が親と住めるのは各階に一部屋ずつしかない。
「二階だよ」
「へーそうかい、俺も二階でね……二階？」
「うん、二階」
そういえば二階の大きめの部屋には成人男性が住んでいたはずだ。もしかしたら単身赴任している父親に会いに来ているのかも知れない。
「それじゃあ俺の部屋はここだから」

鍵を開けて部屋に飛び込むように入り込む。なぜだか、背中から冷や汗が溢れ出ている。

「はあ……なんだったんだあの２人は……」

荷物を置いて椅子に腰掛けると、インターホンの履歴ランプが光っているのが目に入る。

「……誰か来たのか？セールスかなにかだろうけど」

よいしょと立ち上がって履歴を表示する。

そこには、先程まで俺の後ろにいた２人が映りこんでいた。

思い……だした。おれは今朝、あの２人に起こされた。

そうか、やっぱり間違いだったんだな。部屋番号を間違えたとかそこらへんだろう。

あれ？まだ履歴が残ってるな……なんだろう……。ああ、またあの２人か。次は……次もか。あれ……あと数十件あるのももしかして……

なんとなく冷や汗の原因がわかった気がした。部屋番号を間違えたにしても、しつこ

すぎる。

まあ、問題はないだろう。目的であろう部屋の目の前まで送り届けたんだし、きっと今頃再会を祝っているだろう。

俺はベッドに寝転がるとスマホを開いた。９に貸したときのまま、通知を切っていたのを解除する。

すると、Ｌ―ＮＥというメッセージアプリで、母親からメッセージが届いていた。

『ごめーん。最近私の姉が養子をとってあんたにも従姉妹ができたって話したでしょ？あの子たち、今からあんたの家に数日泊めてあげてね～』

は……？

いやいや母上？わが尊敬する母君さま？従姉妹って何ですか聞いてないですけど？それに何？『たち』ってことは複数人？を泊めてあげて？ムリムリムリ！俺んちにはベッド一つだけでソファも布団もないよ！

『いや、急に何？聞いてないんだけどその話』

とりあえずそう返信を返した。いや、落ち着け。まだあの２人と決まったわけではないだろう？でもなんだか……嫌な予感がする。

既読は案外早く付いた。それから間もなく、メッセージが届く。
『あれ？ごめんごめん。とりあえずあの子達にはあんたの部屋の合鍵を渡してるけど、多分インターホンを鳴らすと思うから入れてあげてね？』
『いやいや、無理だよ。どうやって泊めろと？』
『２人ともいい子だから大丈夫よ。ベッドに寝かせてあげなさい。あんたは床にでも寝てなさい』
『いや無理でしょ！』
とりあえず、見られたらヤバイものを子供では手の届かない高い場所へと隠す。ゴミだけは片付けて、物を端によせてスペースだけは作っておいた。
「いや、待て……２人？まさかね……？」
心臓がバクバクなっている。経験上、こういう嫌な予感っていうのはあたりやすい……。

勝手にガチャリと音がなる。さっきかけた鍵が解錠される音だ。ゆっくりと扉開く音がする。
どうやら俺は、ここまでのようだ……。

第三話　夢が覚めるまで

俺は今、最高に足がしびれている。そりゃそうだ。硬い床に正座なんて慣れないことをしているからだ。もう足の感覚がない。

普段は邪魔だからといってしまっているローテーブルを引っ張り出してきて、なけなしの二枚の座布団は向かいに座る2人に譲っている。2人は、笑顔だった。しかし、何も嬉しそうに笑っているとかそんな単純なものではない。人は怒りながらも、笑顔になれるのだ。

「その……ごめんね？」

「おにいさんはひどいです。私たちを締め出すなんて」

「いやだってまさか自分の家が君たちの目的地だとは思わないじゃない？」

「……やっちゃえ9」

45がそういうと、笑顔のまま9がスッと立ち上がる。そしてそのまま俺の背後に回って……いやまさかやめてくれぇぇぇ!!

「うぎゃあああ！」

9は俺の足の裏を、つんつんと突いた。つつきやがった。感覚のなくなっていたと

思っていた足は、触られたぜ！って自己主張を俺の我慢できない強さで示してきやがった。
「ふふふ……これで正直に話す気になったでしょう？」
４５がドヤ顔をしている。こいつ……なんて目をしてやがる……。完全に場を支配したものの目だ……。だめだ、俺にはぁ抵抗することができねえ……。
「……負けたよ。俺の負けだ。なんでも好きにするといぇあっっっっ！コラッ！降参したヤツに追撃は！やめっヤメロぉぉぉ！」
「あはは～お面白い！」
９の容赦ない刺突が俺の足裏を襲う！すでに致命傷を食らっている俺に、逃れるすべはない！
「こらっ！覚えとけよぉ！」
「きゃ～タスケテ４５姉～！」
「ナ、９には手出しさせないわ！」
４５は手を大きく開いて９を背中に庇う。９も笑いながら４５の後ろへと身を隠す。
「４５姉かっこいい～」
「おらぁ！いくぞぉぉぉあああああ足痛いィィィ！」
サッと立ち上がった俺は足のしびれでバランスを崩し、４５の目の前に倒れる。

「あはは！私たちの勝ち～！」
「くっやられた……だが明日は俺が勝つからな……」
「私と9に勝とうなんて百年は早いわ！」
「見てろよ……ガクリ」
俺は白目を向いて気を失ったふりをする。ツンツンと9が生死確認をしてくるのがくすぐったい。
「……まあこれくらいでいいか」
「あっ起き上がった！」
「それで、どうして2人がここに？」
「あれ？おばさんから話は聞いてない？」
「……一応、君たちの口からききたいな」
下手すりゃ俺の人生が終わる。幼女を家に連れ込んだとして社会的に殺される。だから、慎重にだ。この子らの機嫌をとりつつ、そっと帰して、俺は平穏な夏休みを手に入れる！
ん？推しと過ごす夏休み？うらやましい？
待て待て。二次元のキャラである推しが三次元のこの世界にいるわけないだろう？だからこれは夢なんだよきっと。目が覚めるまで時間のかかる夢なんだ。

だから俺はこの世界を楽しむ！最大限に！警察のお世話にならないように！

「えっと私たちはようし？でおにいさんの従姉妹ってことになったんだけど」
「私たちの親、つまりはお兄ちゃんのおじさんとおばさんが旅行の予定をいれちゃってね！私たちを世話してくれる人がいなくなっちゃったの」
「でも俺の母親とか選択肢はあっただろうに……なんでよりにもよって俺なんだ」
「あれ？お兄さんもしかして知らない？」
「え？なにを……？」
　なんとなく嫌な予感がしていた。というのも俺の母親は、いつも突然何かをしはじめる。専業主婦を辞め働き始めたときも、資格をとった時も、仕事を辞めたときも、俺がそのことを知ったのは当日だった。
「お兄ちゃんのママ、今は地球の裏側にいるよ？」
「なんで!?なんでなの!?どうしてよりにもよってこんなときに地球上で一番遠い場所にいるの!?」
「ついでに私たちの親と一緒だよ」
「ねえなんで!?どうしておじさんとおばさんまで地球の裏側なの!?どうして一緒なの!?仲良しってそぶりは見せなかったじゃん!?」

「そしてさらに言っちゃうと、お兄ちゃんのお姉ちゃんは出張で家にいないし、お兄ちゃんのお父さんは今頃空の旅だよ」
「そこまで把握済み!?……たしかにあってるし」
俺はがっくりと膝をつく。
「なるほど……だから俺か」
まあ順当に親戚をあたっていったなら俺になる。祖父母はもう他界しているからな。おばさんとうちの母親は仲が良かったし、その点で信用できる親戚として残ったのが俺だったのかもしれない。
「それで……」
俺は2人の前にあぐらをかいて座る。
「2人はどこで9と45って名前を?」

＝＊＝＊＝＊＝

「……あれ?なんだっけ」
昨夜の記憶が曖昧だ……。頭がガンガンする。
身体を起こしてあたりを見回すと、酒を呑んだあとが残っている。一昨日のままだ。

昨日は……なんだか良い夢を見ていた気がする。

「さて……さすがに片付けようか」

ローテーブルの上にごみ袋を広げ、ポンポンとゴミを放り投げる。酒や弁当、菓子やアイスなど、さまざまなゴミが散乱している。

ごみ袋を縛って外のゴミ置き場に捨ててくる。部屋に戻ると、少し違和感を覚えた。

なんて言ってはみたものの、やっぱりいつもの俺の部屋だ。きっと飲み過ぎで頭が殺られたんだろう。普段は飲まない缶チューハイもたくさんゴミで出したし。

俺は鍵をかけて靴を脱いだ。

ベッドにダイブして背中に何かがあたる。それは毛布だ。少し大きいから邪魔で、結局普段は隅においやっている毛布だ。

いや、おかしい。おかしいぞ。そもそも昨日は酒を買ってない。一昨日にすべて消費しきって家には1杯分すら残ってなかったはずだ。

それに部屋の違和感もある。頭がおかしくなったんじゃない。ローテーブルは一昨日出してない。基本、誰かが来た時にしか出さない。缶チューハイも自分では買わな

い。瓶で買って自分で割って楽しむのがいつもの俺だ。毛布だって、ベッドの真ん中に置かれているはずがない。いつもは隅だったり床に落ちていたりだ。

明らかに、いつもどおりの部屋ではない。確実に昨日、何かがあったに違いない……！

先程かけた玄関の鍵が、ガチャリと開く音がした。

第四話　誰だろう?答えはわかっているけれど

「ねえ、どこいくの?」
　出かけようとする俺に9がかけよってくる。さっきまではゲームをしていたのに、床にコントローラーを投げ出してこっちにきたみたいだ。
「ちょっとお買い物だよ。9ちゃんと45ちゃんがきたから食材がたりなくてね」
　実際は食費もなかなかピンチである。単純計算すれば三倍、体格差を考えれば2倍から2．5倍くらいは使うことになる。仕送りとバイト代が溜まっていたからなんとかなったが、給料日まであと数十日を乗り切れる気はしない。
「わたしも行く〜!」
「えっ?」
「だから私も買い物に行く〜!」
　9はいそいそと出かける準備をする。
「45姉はどうする?」
「わ、私は……で、でも」
「45ちゃんも来る?」

「い、いいの？」
「うん、もちろん」
むしろ１人で残すことの方が心配だもの……。だから俺を幼女を侍らせる不審者って目で俺を見ないで！見るな！
「わかった、私も行く」
そういって４５はうさぎのポーチを握ってトコトコとかけよってくる。
「よし、それじゃあいこうか？」
「あっちょっとまって」
４５はそういうと、ポーチから膨らんだ封筒を取り出す。
「これ、お義母さんから渡してって」
「え？うん、ありがとう」
受け取った封筒はなかなかに厚さがある。そっと中身を見ると……諭吉さんがぎっしりと詰まっていた。
「……これは？」
「私たちの生活費と、それからお兄さんへのお礼だって」
明らかに多すぎる。
俺はそっとＬ―ＮＥを起動させて母親に連絡をとる。

『おばさん宝くじでも当てた?』
『あれ?そうよ。よくわかったわね』
『なんかお礼って言っていっぱいお金もらった』
『そう、それは良かったわね～それじゃあ私はそろそろ寝るから～』
そう返信したっきり、既読すらつかなくなってしまった。
「まあどうやら本当みたいだし、いいか」
封筒から諭吉を数枚抜いて、引き出しにしまう。まったく大金を小さい子に預けるなんておばさんは何を考えているんだか。しかし、こんだけあればある程度自由にできそうだ。遊びにつれていくのもいいかもしれない。
「ほら、お金の問題も解決したし、早く行こう?」
９が扉を開けると、暗い玄関に外の光が漏れ出て、俺は目を細めた。眩しい、ああ眩しっ!二日酔いの頭に効く……
「どうしたの?」
「具合が悪いの?」
９と４５が顔を覗き込んでくる。
「いや、大丈夫だよ」
まったく、二日酔いってやつはどうにかならんのか。初めてだぞ、二日酔いになった

のは。
「じゃあいこ？」
そう言って外にでる。すると、ちょうど同じフロアの人も外出するところだったようで、鉢合わせた。
「こんにちは～」
「こ、こんにちは」
意気揚々と９が、それにつられ４５も挨拶をする。さすがいい子だ。挨拶ってのは大事ってよくわかってる。
「ああ、こんにちは」
その男性は９と４５に挨拶を返すと、視線を俺の方に向ける。
「あっどうも」
「どうも」
少し訝しむ目を見せるが、９と４５が俺を引っ張っているのを見てその視線は和らいだ。まったく、不審者を見るような目を向けるなんて酷い人だ。
「ちょっと……相談事があるんですが少し時間いいですか？」
「えっ？俺ですか？」
「ええ」

悩むが……仕方がないか。俺は近所付き合いも大切にするタイプの人間なんだ。
「9ちゃん45ちゃん、先に下に降りて待っててくれる?」
「わかった!」
「……うん」
2人が階段を降りていく背中を見送り、それから男性の方へと向き直る。
「それで相談とは?」
「その前に君は学生だよね?」
「ええ、そこの大学の学生です」
「じゃあさっきの女の子は?」
「ああ、親戚の子ですよ。旅行に行ってる間、預かってるんです」
「そうか……」
そこまで聞いていったい何を言ってくるのだろうか。まさか昨日、俺が酔い過ぎて騒いでしまったとか?もしくは意外と女児の声は響きやすいから気をつけてほしいとか?
「じつは……お願いがあるんだ」
「お願い……ですか?」
「実は僕にもあの娘たちと同じくらいの娘が1人、いるんだ」

「ええ、それで？」
「実は今度、長期の出張に行かなくてはいけなくてね。でもあの娘は行きたくないっていうんだ」
「そ、そうなんですか」
「だから、君に娘の面倒を見てほしいんだ」
「え？でも俺は赤の他人ですよ？」
「……実は情けない話、実家から勘当されていてね。妻も死別していて頼れる人がいないんだ」
「そ、そうですか……」
　やたら重いな。まさかの父子家庭だし。
「でも俺がその娘によからぬことをするかもしれないですよ？」
「するのかい？たとえばあの娘たちに、したのかい？」
「いや、まあしませんけど」
「それでこそだ。頼むよ。タダとは言わない。今度の仕事が成功すればいくらでもお礼ができる」
「そ、そうですか」
　どうするか悩む。今更1人増えたくらいどうってことはない。けれど、だからといっ

て安請け合いするような話でもない。
「……ダメかい?一応前金を支払うこともできるけれど」
　そう言って男性はカバンから何やら紙を取り出す。それは小切手だった。いや、初めて見た。映画とかでしか見たことないぞ……。
「ここに好きな額を書いてくれて構わない」
「好きな額?5千兆円って書いても?」
「ははは、そんな金を受け取る覚悟があるなら書いていいよ」
　出せないとは言わないのか……。この男、何者だ?
「いえ、俺には決められません」
「そうかい。それじゃあ……これくらいかな」
　そういって考えられないような桁数を書き込んでいく。
「いや!そんなにいらないですって!じゃあわかりました!後で全部払ってくれればいいですから!」
「本当かい!?それは助かるよ!」
「とりあえず急ぎではないんですよね?」
「ああ、出発は今週末だからね。それまでにまた伺うことにしよう」
「日程を空けときます」

「本当にありがとう。君がここに住んでいてくれて助かったよ」
「あはは……」
乾いた笑いをしていると、男性の出てきた扉がカチャリと音を立てて開く。
「お父さん、会社に行かなくていいの？」
「おっと、もうこんな時間か。それじゃあ失礼するよ」
そういって男性は急いで行ってしまった。
「あなたが今度から私を世話するの？」
「あはは……嘘だろ？」
「なに？わたしの顔に何か付いてるの？」
ワンピースを着た少女は不思議そうに首をかしげた。さらさらの銀髪が光を反射した。
「い、いや。なんでもないよ」
「お兄さんも人を待たせてるんじゃないの？」
「あっそうだった。それじゃあまた今度ね！」
いけない……。９と４５を待たせすぎてしまった。拗ねてないといいんだが……。
このあとめちゃくちゃ拗ねてた９と４５の機嫌をとるために、近場のコンビニでお菓

子を買ってあげた。

なんとか機嫌をなおしてくれたことに安堵してしまって、さっきのこれまた見覚えのある少女のことはすっかり頭から抜けてしまっていた。

第五話　お買いもの

「いらっ……いらっしゃいませー」

いつものやる気のなさそうな店員が少しギョッとしたような表情をしている。いや、犯罪じゃない。これは犯罪じゃないからそんな目で見ないで。

食材はたくさん、２人の好みは知らん。そんなことを考える俺はまるでお父さん。

「ねえねえ、これ食べてもいい？」

そういって９が指さしてきたのはサイコロステーキの試食だった。

「……アレルギーとかはない？」

「うん、大丈夫だよ！」

「ならよかった。４５ちゃんもどう？」

「……！い、いいの？」

そういって４５もトテトテと試食コーナーに駆け寄ってきた。

「やわらか～い！ねえ、これすごいよ！」

「うん、おいしい！」

２人は口をもぐもぐとさせながら、そわそわとこちらの様子を見てくる。

ちらりちらりと、こっちの様子を見て……くる……。
「わかったよ！今日はサイコロステーキだ！」
こちとら金なら余裕があるんじゃ！この程度、なんぼのもんじゃい！
それにこの娘らは女児……食べる量も少ない！つまりは安上がり！俺が食わなきゃいいだけの話！
「お兄ちゃんも食べなよ～！美味しいよ？」
「はいっお兄さん」
９がそう言って、４５がサイコロステーキを手渡してくる。

……美味しいな、もう一袋買っておこう。
「あら、良いお兄さんがいるのね～」
試食コーナーから離れようとすると、目の前に立ちふさがる人物が現れた。
俺がくる時間帯によくいる、パートのおばちゃんだ。フレンドリーなのはいいし、いろいろと知識もあるらしい……のだが、あいにく話したことはない。
話したことはないけど……だからって２人を足止めすることで強制的に俺の足を止めるとは……なかなか策士である。
「今日の晩ごはんはお兄さんがステーキ焼いてくれるって」

「へぇ、それは良かったわね～」
一応顔ぐらいは知っているし、２人も怖がってないからそのまま空気になろうとする。しかし、パートのおばちゃんアイが狙いを定めたのは俺だった。
「そのステーキね、このソースを掛けると美味いのよ」
だ、大根おろしソース!?いや、しかし……。ステーキにはオニオンソース派なんだが……。
「いえ、結構で……」
そう言い切ることは許されない。許されていなかった。やはりこのおばちゃん、策士だ。まさか視線は俺を向いているというのに、ターゲット自体は２人のままだ！はかられた！
そう、さっきの様子をうかがうような目とはうって変わって、２人は好奇心と期待の目で俺を見てくる。
「わか……りました。一つください」
この程度の出費……痛くも痒くもないわ……。
「それとね！」
おばちゃんの攻撃フェイズは終了してないってのか!?
「今ならこっちのソースと一緒に買うとお得なのよ」

そういっておばちゃんが見せてきたのは、醤油ベースのステーキソースだ。
「くっ……買います」
買い物かごにソースが入っていく。これはオニオンソースは断念するしか……
「お兄さん、あと十分したらタイムセールでね、オニオンソースも安くなるよ」
「買います」
もう良い。我慢などしてたまるか。俺はこの2人と幸せな食卓を囲むんだ。そのためならなんだってしてやる。販売商法に乗っかかる愚か者?なんとでも言え。
俺は自分と、それからあの2人のためならどんな汚名でも被ってみせよう!
「お兄ちゃ～ん」
猫なで声が聞こえてはたと振り返ると、そこには両手にお菓子を抱えている9がいた。満面の笑みである。
「一応聞こうか。9ちゃん、それは何?」
「お菓子!」
系統が面白い。珍味からスナック、チョコ系まで揃えている。
「9ちゃんはお菓子が好きなの?」
「うん!でも45姉もお菓子が好きだよ」
「ちょっと、9」

「そうかい。それじゃあ2人の分のお菓子は入れていいよ」
「わ～いありがとう！」
そういって9は買い物かごにお菓子を入れてくる。
「45ちゃんはいいの？」
「……？あ、9が取ってきてくれたから」
「そ、そうなんだ」
どうやら45の好みは9が把握しているらしい。やっぱり仲が良い。姉妹間の仲が良いのは、微笑ましい。
「ねえ、他にはまだあるの？」
「……いや、コレくらいにしとこうか」
ステーキソースをかごに入れたあたりから諦めて、もうカートを使っている。買い物かごはもういっぱいだ。
よくよく考えたらこれを持って帰るの俺だ……。いや、俺ならできる。頑張れ俺、負けるな俺。
「いっいらっしゃいませ～」
レジはいつものやる気のない店員だが、今日はなんだか俺のことをじろじろ見てくる。

「……な、なにか？」
「い、いえ」
手際よく品物を通して、値段を表示する。いままでの俺だったら口からため息が出ていただ、今の俺ならこの程度……！
「あ、ありがとうございました～」
会計は普通に終わった。袋に詰めるのも問題はない。そこからが問題なのだ。俺に手がもう数本あればどれだけ良かったか……。
「お兄ちゃん、重いでしょ？私も持つ！」
「わ、私も」
やっぱりこの２人は天使かもしれない。お菓子などを詰めた軽めの袋を２人に託し、俺は両腕に力をいれる。
十中八九、明日は筋肉痛だ……。

＝＊＝＊＝＊＝

おっと鍵がポケットに入ったまんまだ……。どうやってとりだそうかと両腕にある荷物を交互に見比べる。

「お兄ちゃん！ちょっとごめんね」
「９ちゃんいったいなにを……!?」
９はあろうことか俺のズボンの右ポケットに手を突っ込んできた。小さい手が太ももに刺激を与えて、くすぐったくて笑いそうになる。
「あった！」
そういって９は鍵をとりだした。
「あっそういうことか」
よかった。突然９が身動き取れない男のポケットに手を突っ込む遊びを思いついたのかとヒヤヒヤした。
……ん？でもどうして右ポケットにあるってわかったんだ？
「ねえ９ちゃん、どうして右ポケットに鍵があるってわかったの？」
「お兄ちゃんいつも右ポケットに入れてるもん」
「ああ、そういうことか」
言われてみればこの部屋にすみ始めてからというもの、鍵を右ポケットにいれがちだ。
「……？あれ？」
「どうしたの９ちゃん」

９は手で止まってとジェスチャーする。
「鍵が……開いてる」
「締め忘れたんだなきっと」
「いいえ、お兄さんが鍵をかけるところ、私は見てたよ」
４５も否定する。これは……そういうごっこ遊びだろうか？なら付き合ってあげるしかあるまい。
「９ちゃん、どうしようか？」
「私には荷が重いよ～４５姉、助けて」
「そうね、私と９で突入しましょ」
「うん、賛成！」
そういって４５と９は扉の前に集まる。
「よし、いくよ４５姉」
「ええ、いくよ９」
２人が扉を開け部屋へと駆け込んで行く。まったく子供ってのは楽しそうで何よりだ。
あとを追って玄関に入ると、ありえない状況になっていた。
４５と９は玄関に立ち尽くしている。部屋は違和感の塊で、きれいになってる。まだ

そして、玄関の側のキッチンには、１人の少女が台の上に立っていた。
「おかえりなさい。ずいぶんと遅かったわね」
舌足らずであるのに凛としているその声は、少し前に聞き覚えがあった。
その少女は台から降りると、エプロンを外した。
その台には、４１６と数字が刻まれていた。もちろん、その数字が意味するところを察せないほど、俺はバカではなかった。

第六話　どうしてこうなったんだっけ!?

「えっと、君はおとなりさんの娘さんだよね」
　コクリと少女は頷いた。
「もしかしなくても、君は４１６って名前？」
　再びコクリと少女は頷いた。
「えっと……ここは俺の部屋なんだけど、何をしてるのかな？」
「たまってた洗い物を片付けてるの」
　そう言う彼女の手を見てみれば、確かにスポンジとお皿を握っている。俺がためていた洗い物の山は、今はその大半がきれいにラックに収納されている。
「ふーん。それで、どうやって入ったの？」
「えーっと」
　俺から目線をそらす。
「開いてたのよ」
　あからさまに嘘をついてますと顔に書いている。この少女、無表情なフリをしているが考えることが顔や行動に現れるタイプだ。なにこの子……まさにドルフロの４１６

を外見も中身も幼くしたみたい。
「でもお兄さんはちゃんと鍵を閉めてたよ？私と９が見てたもん」
「ひ、開いてたんだってば！」
「お兄ちゃんはちゃんとしめてたよ！」
「う、うう……」
「こら、４５ちゃんも９ちゃんもそれくらいにしとこう？」
「だってお兄さん！」
「この子お兄さんが悪いって！」
「まあまあ、落ち着いて。それに俺のせいとは言ってないでしょ？」
「それは……」
「そうだけど……」
「４１６ちゃん、ごめんね？」
涙目になってる４１６ちゃんの方を見る。

カシャン

目を潤ませながら台を降りた４１６ちゃんの足元から、金属製の何かが落ちた音がし

た。

「……9ちゃん、45ちゃん。あれなんだかわかる？」

「わかんな～い」

「わ、私も知らない」

「だよね～。俺も知らないや～」

　知らないな～。あんな感じの道具をどこかで見たことあるけど、知らないな～。こう細長いところとか、先っぽの方が折り曲がってるところとか、まるでピッキングツールみたいな形をしているけれど、いったい何なんだろうな～。

「いや！ピッキングツールだよねどう見ても！」

「ひっひぃ！」

「あっ待って泣かないで！泣き出さないで！」

「ひっぐ……うっぐ……」

「ごめんね！急に大声出して驚かせちゃったね！ほら、お詫びにコレあげる！」

　なんと期間限定！有名なチョコ菓子の期間限定味！数ヶ月くらい置いてある気もするけど！

「う、うん……」

　良かった。受け取ってくれた。まじで、幼女を泣かせたとなっては紳士の方々からヤ

られかねん。
「それで、何しにきたのかな？」
「えっと、今日は掃除」
「うん、見ればわかる」
だって、明らかに掃除された跡があるんだもの……。床とか、張り替えたの？ってレベルでキレイだし。
「それじゃあ、どうして俺の部屋を掃除しにきたの？」
「だって私も住むから。私、キレイなところ以外は住みたくないから」
「……へ、へぇ～」
随分としっかりとしてるみたいでなによりだ。
「ねえ４１６ちゃん！」
９がそう言って４１６の方に駆け寄っていく。
「４１６ちゃんもここに住むの!?」
９の背中しか見えないが、俺にはわかる。きっと９は今までにないくらいに、目をキラキラと光らせてる。絶対そうだ。
「う、うん……」
「わ～い！やったね４５姉！」

９ははしゃぎまわる。４５も、どこか嬉しそうだ。
「でも４１６ちゃんのお部屋は隣だろう?」
「えっ……ダメ……なの……?」
「ああわかったわかった！いいから！大丈夫だから！」
ベッドが広めで助かった……。あれならちびっこ３人くらい、受け止めてくれるだろ……。俺?今日も椅子か床だな。なに、若いからこれくらい大丈夫だ！大丈夫なんだよ！
……こんど布団買ってくるか。
そんなこんなで、期間限定とは言え、同居人がさらに増えることになったのだった……。

＝＊＝＊＝＊＝

「そういう訳で出張が早まってしまってね。４１６には部屋の鍵を渡しているから、何か必要になったら入っても構わないよ」
「はあ、そうですか」

「安心してくれ。迷惑料として４１６にもたせているものがあるから」
「お金……ですか？」
「もちろん。なにかと入り用になるだろう？気にせず使ってくれ」
「……もう何も言いません」
「そうかい。っと飛行機の時間だ。僕は行くよ」
「はい……お気をつけてー」
　もう何も言うまい。お隣さんには警戒心というものは無いんだろうか……。まあ変な気は起こすつもりないけどさぁ。
「４１６ちゃんよわ～い！」
「また負けた！次は絶対負けない！」
「……猫のアップリケ、かわいい」
「当たり前でしょ！私のエプロンだもの！」
　まあ、どうやら馴染めているようだし安心はしてる。けどさ、これはどうしろと……？この札束をどうしろと？
　４１６から渡された封筒には、案の定大金が入っていた。たしか１００万円くらい。
　あのさ、どういう計算をしたら１００万ってお金が出てくるの？わからない。俺にはわからねえよ……。

そろそろ盗難が怖くなってきた。いつか銀行に預けにいかなきゃいけないかな……。
「お兄ちゃんもゲームしよ!」
「それじゃあ私はそろそろ……」
「ん?４１６ちゃんは帰るの?」
「いいや?」
４１６はエプロンと三角巾をして、どこからともなく台を取り出す。
「料理!?いいよ、俺がやるよ!」
「いいから私にまかせて!」
自信たっぷりの表情をしている……。さすがの余裕、さすがは４１６似の美少女だ……!

このあとむちゃくちゃムシャムシャした。
すっごく美味しかったです……。

＝＊＝＊＝＊＝

「起きて!ねえ起きて!」

ああ、ゲームの推しの声が聞こえる。推しの声に起こされるとか俺は幸せものだなぁ。

「ねえ！早く起きて！」

ああ、推しの声とともに腹部にも衝撃が……。ん？衝撃？

「うぉ!?」

「あっお兄ちゃん起きた～！」

椅子で寝てた俺の膝の上には、９が乗っかっている。見回して見れば、４５はベッドの上でうさぎのぬいぐるみを抱いてゴロゴロと転がっている。

台所の方には４１６がいる。件の台の上に乗って料理をしている。

「ん……ん―？」

寝起きだからか、いまいち頭が働かないな……どうしてこうなったんだっけ……。

第七話　まあ、そうだよね!

お、重い……。件のお金を銀行に預けて、その帰りにアイスを買って帰ろうとしたのが失敗だった。三人にプラス自分の分、喧嘩もしないよう全種類複数個買うなんてバカだった。

ちょうどお天道様は真上にあって、容赦なく夏の日差しを俺に突き刺してきやがる。

まったく、こんなに暑いとアイスと一緒に溶けちまうよ……俺の脳みそもさ……。それこそ今、目の前を歩いている人のようにフラフラしてさ、しまいには力が抜けていって倒れて……

……倒れて? 倒れて!?

「ちょっと! 大丈夫ですか!」

「えっあっうん……いややっぱ無理……」

滑り込みセーフ! なんとか倒れる前に身体を支えることができた。ってよくよく見れば見たことのある顔だ。

「スーパーのバイトさん？」
「あっよく来る人ぉ～」
あのやる気のなさげなバイトの人に顔を覚えられていたらしいがそれはさておき。
この女性をどうすればいいんだろう……。
「うへ、うへへ、人肌ひんやりしてる～」
暑いっていうのに、その女性は俺に抱きついてくる。
いやさ、確かにさっきまで冷房ガンガンの室内にいたし、冷凍庫に手を突っ込んでアイスを取ってるから冷えてるかもしれない。
でもそれはよくない。良くないよ。俺だって男だぞ？女性に腕に頬ずりされるなんて、公表したくないぞ？刺されかねん。
「えへ……うへ……あは……うっ」
なんか嫌な予感がする。
こういうときは予感に限って良く当たるんだ。そう、例えば……
「お、オェ――」
服に吐かれたりな……。

＝＊＝＊＝＊＝

『わかった。お兄さんは服が汚れただけなんだね?』
「うん。だけどもう少し帰りは遅くなると思う」
『わかった。……9に変わるね』
『お兄ちゃん!運命の出会いをしたって本当?』
　いや、服に吐かれるのを運命の出会いって言うのはいささか無理がありゃせんか?
「いや、そんなわけないでしょ」
『ちぇっ、せっかく新しいお嫁さん候補を連れてきてしゅらばってのになると思ったのに』
　うん、帰ってから9に問いただすことが増えたな。どこで修羅場なんてワードを見つけたんだ、まったくもう。
「とりあえず、少し遅くなるから416ちゃんと仲良くしててね」
『うん、わかった!45姉もわかったってさ』
「よし、それじゃあ切るね」
『うん、ばいば~い』
　電話が切れたのを見て、はぁとため息をはく。このまま沈んでいたいが、そうは問屋が卸さない。看護師が近づいてくる。

「えっと……付き添いの方ですか？」
「はい。それで、彼女どうなんです？」
「大丈夫でしょう。ただの熱中症ですね、今は点滴をうけているところです」
「それは良かった」
「もう少し待ってくださいね」
「え？」
「彼女さんの家までちゃんと送ってあげてくださいね」
「いや、あの人は彼女じゃ」
「今日は体力が下がっているわけですから、様子をみておいてください」
この看護師、人の話を聞かないタイプだ……。
「は、はぁわかりました」
ここは処世術、とりあえず言葉を濁すで対抗するんだ！これもバイトで培った力！ありがとう店長！
「それじゃあごゆっくり～」
看護師さんはにんまりとしながらさっていった。まったく、若い子はお盛んね～っていう目でこっちを見ないでくれ。
まあ、仕方ないか。腕組んでるような体勢で入ってきたからね。誤解されるのも無理

はない。

ガタガタと扉をスライドさせて、部屋に入ってみる。音に気がついてはいるものの、寝転がったままだ。

「あっその……この度はご迷惑をおかけしました?」

なぜ疑問系なんだ。それに寝転がりながらそんなに丁寧な言葉をつかわれると複雑な気持ちになる……。

「いいですよ。でもどうしてそんなに厚着を?」

俺なんか半袖に七分丈のズボンでも汗だくだった。というのに、目の前のこの子は真っ黒なズボンに黒いパーカーまで羽織っていた。

「それは……バイトにいく前で……」

「へえ、バイト前……。バイトは大丈夫だったの?」

「はい、社員さんにいったら今日は暇だしゆっくりしていいって」

なんだよ……いいバイト先じゃねぇか……。ますますあのスーパーが気になり始めたぜ。

「は～い、失礼しますね～」

そう言ってさっきの看護師が入ってくる。まったくこの病院にはもっとまともなのはいないのか!

「点滴は終わりですね～。受付の前でお待ちください」
この看護師……手際はめっちゃいいだと!?熟練の看護師だったか……。
「はい、どうも」
そういって身支度をする。といっても、また黒いパーカーを着ようとしてるだけだけども。いやいや、それで倒れたばっかりだろ。
「パーカーは着ない方がいいんじゃない？」
「でもこれ着ないといけないから……」
そういって指差すのはポロシャツについたワンポイントのマークだ。もちろんあのスーパーのマークである。
「それなら……仕方がないのか」
「うん、暑いけどね……」
「あら、彼氏さんのソレを着ていけば？」
あの看護師……そっと後ろ手に隠した俺の上着を指さしていきやがった。
いやね！彼氏シャツとかね！良いと思うよ！でもね！この子彼女じゃないんだわ！ただの顔見知りって程度なんだわ！
「ははは、着るかい？なんてね……」
ほら、笑い飛ばせ！拒絶はしてほしくないけど遠慮しますアハハって！

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」
「……えっ?」
ちょうどその子の目の前に差し出してたもんだから、スッと取られてしまった。
「白いから透けるけど、黒いパーカーよりはマシ」
黒いポロシャツは確かに透けている……。本当に抵抗感なく着ちゃったよこの子。もしかして俺のこと好きなの?なんてね。
受付にいくと、まあなんというか少子高齢化って本当だったんやなって実感する。若いのなって俺たちしかいない。
だからって!こう生暖かい目で見るな!若いもんはいいよな〜って目を向けるな!
「あっ私みたい。いってくる」
そういって受付の方へと行ってしまった。
受付のお姉さんが口を開いて、名前を呼ぶ。
「G11様〜」
「は〜い」
……。まあそうだよねぇ。だって『見たことのある顔だ』ったんだもの。そりゃね、普段は似てるな〜とかで済んでたかもしれないよ?でもさ、ウチで待ってくれてるチビたちをみるとさ、こう、変わって見えるんだよね。

「おまたせ～。今日はありがとう」

「どういたしまして」

そういって笑った表情は、俺の知ってるゲーム内のＧ１１より少し大人びて見えた。

第八話　残念だが、俺にも無理だ

「あっ買い物して帰らなきゃ」
「ん？それじゃあそこのコンビニでいいかな？」
「うん……」
　コンビニに入ると、涼しい冷房の風が俺たちを迎え入れてくれる。そうか、ここがエデンか……
「今日の晩ごはんを……」
　目の前をあるく彼女の足が、弁当コーナーの前で曲がりかけたのを見逃す俺ではない。知っているぞ。そのさき先に何があるのかも分かるぞ。
「えっと……どれにしようかなー」
　少し背伸びをしながらサラダのコーナーを見てるＧ１１は、いまだチラチラとそのコーナー……カップ麺のコーナーに目が移っている。
「そうだ。俺、カップ麺買っていきたいからあっち行ってもいい？」
「……！わ、私もついてくよ」
　わかりやすく目を光らせながら、ついてくる。なんだか身長も低めで良かったわ。

「これこれ、これがいいんだよ」
「わかってる～でも私はこっち」
「おっ通だねぇ」
「でしょー？」
　ニコニコしながらカップ麺を手にとっている。
「……あっいや違うんだよ？いつもは食べてないんだよ？」
「いや、気にしないけど……」
「食べてないよぉ」
「いや、気にしないから」
「そう？じゃあ遠慮なく」
　ポンポンとかごにいくつもいれらていく。随分と買い込むな……。
「満足？」
「まんぞくぅ」
　満ち足りた顔をしながらレジへと歩いていく。まったく……サラダを買うって姿勢はどこにいったんだか……。
「ありがとうございました～！」
　元気の良い店員の挨拶を背に、コンビニを出ていく。

「さて、帰ろうか」
「うん……」
俺たちは歩きはじめる。そう、俺の家の方向に……。
「家、こっち方面なんだ」
「うん、そうだよ～」
交差点にさしかかり、同じ信号で立ち止まる。
「同じ方面だね～」
「うん、そうだね～」
なんとなく嫌な予感がしてる。なんたって俺の隣に立っているのは、ゲーム内で４５、９そして４１６と同じ小隊にいるメンバーだ。そして、４５、９、４１６は俺の家にいる。俺の家にいるのだ！
「あの～？」
「ん？何～？」
今、俺はすんでるアパートの玄関にいる。もちろん隣にＧ１１もいる。
「もしかして、ここに住んでる？」
「うん」
普通に頷く。玄関の扉をくぐって、オートロックの扉を開く。

「あっエレベーターは使う？」
「いや、２階だから使わない」
「……ふーん」
　いや、二階？いや、まさかね？
「それじゃあ私はここだから」
「あっうん」
　ですよねー。うん、察してた。
　ガチャンと音をたてて、隣の部屋の扉が閉まる。
「だよなぁ。そりゃこんだけ揃ってたらそうだよなぁ」
「なにが？」
　扉が開いて、お玉を持った４１６が首をかしげてくる。
「いや、なんでもないよ。ただいま」
「おかえりなさい。ご飯できてるわよ」
「今日は何だい？」
「当てて見て？」
「といっても玄関から見えてるけどね」
　鍋の中にはカレーがあり、野菜を切った跡もある。

「カレーとサラダってところかな」
「正解。ほら、早く手を洗ってきて？」
「はいはい」
　洗面所で手を洗う。
「ちゃんと石鹸で洗いなさいよ～」
「わかってるよ」
　４１６はまるでお母さんだな。家事はするし、衛生面も気にするし、少し口うるさいところなんてまさにそれだ。
「ほら９ちゃん、ゲーム片付けて。４５ちゃん、手伝ってくれる？」
「はーい！」
「うん、わかった」
　９と４５はさっと片付けて、４１６のいる台所に手伝いにいく。まったくいい子たちだ。手がかからなくてお兄さんもおもわずにっこりだ。

「よし、それじゃあいただきます」
「「いただきまーす」」

3人の声が揃った時だった。
ピンポーン
インターホンがなった。こんな時間に。しかも、オートロックのところではなく、部屋の扉挟んだ向こう側だ。
「私がでようか?」
「いいよ。9ちゃんは食べてて」
不審者ってこともあり得るから、細心の注意をはらわなきゃならん。なんたってこっちは子供が3人と非力な一般大学生が1人だ。
のぞき穴から、そっと外を見る。

そこに立っていたのは、さっき別れたばかりのお隣さんだった。
「ど、どうしたんですか?」
扉を開けると、腕にすがりつかられる。
「お湯……お湯貸して……ポット壊れた……」
「まさか家にカップ麺しかないんですか?」
「ぐっそれは……そうだけど」

「……４１６ちゃん、カレーまだ残ってる？」
「うん、残ってるけど……」
よかった。二日目のカレーってのも乙なもんだけど、やっぱり皆で食べないとね。
「というわけなんでカレー食べて行かない？」
「えっ!?いいの！」
グッと距離を詰めてくる。近いよ近い。ほら、チビたちも見てるからさ、もっと節度をもった距離というものをね？
「ねえ、お姉ちゃんってスーパーの店員だよね」
「どうしてここにいるの？」
ああ、ＵＭＰ姉妹。そう初対面の人に詰め寄らないで。相手がこの人だからいいけど、不審者だったらどうするの。
「えっあっあれ？た、たすけて？」
ふふふ、ＵＭＰサンドには勝てないだろう？でもな……俺も止める手はないんだ。
「諦めて？」
「そんなぁ～」
情けない声が、部屋に響いた。

第九話　目標目前！突撃い！

「起きて！ねえ起きて！」

ああ、ゲームの推しの声が聞こえる。推しの声に起こされるとか俺は幸せものだなぁ。

「ねえ！早く起きて！」

ああ、推しの声とともに腹部にも衝撃が……うっ、うおっこ、腰に響く……。

「９ちゃん……もうちょっと優しく起こして……」

「ん？お兄ちゃんどうしたの？元気ないよ？」

「いや、大丈夫だよ」

俺だってまだ若いんだから、そんな数日椅子で寝たからって身体壊すわけないでしょ。

「お兄さん、ご飯できてるよ」

「４５が駆け寄ってきて、足にコツンとぶつかる。

「」

????!!!????

「んーどうしたの、変な顔して?」
「い、いや……なんでもない」
な、なんでもない。なんでもないんだ。まさか利き足に当たられて、それが身体の節々に響いたとかそんなわけじゃないんだ。だからそんな顔を向けないでくれよＧ１１。
Ｇ１１の目線は俺を見たあと、そっと目を俺の後ろの方に向けた。
ってどうしたの?急に顔が青ざめて……?
「……お兄さん」
ん、何かな……って包丁じゃない?こ、こっち向けてこないで!
「よ、４１６ちゃんどうしたの」
「そ、その……壊れてしまって」

「ん?ああ、刃の部分が欠けてるのね」
「手が滑って、刃の方から落ちて……」
「いいよいいよ。それより４１６ちゃんは怪我はない?」
「もちろん」
「なら良かった。けど危ないし……そうだな」

これはもう、あそこに行くしかない。幸い人手はいるし、保護者……になるかはわからないがＧ１１もいる。
「よし、ディスカウントストアに行こうか」
そう、これは４１６の安全のためだ。ついでにお布団も買うだけだ。だから、これは決して俺の安眠のためという訳ではない！断じて安眠のためではない！

＝＊＝＊＝＊＝

「わー！すごーい！ひろーい！」
「９、待って……！」
「９ちゃん！４５ちゃん！ちょっと待って！」
急いで２人を捕まえる。店内で走り回ると危ないじゃあないか。
「こらっ。危ないだろう？」
「う、うん。ごめんなさい」
「ご……ごめんなさい……」
「わかってくれたなら何よりだよ」
「じゃあお兄ちゃん、手繋いで～」

　んん？９は何を言ってるのかな～？お兄さんにはわからないな？
「わ、わたしも……」
　４５も？ああ、ダメだよ……完全に幼女２人を拉致してきた不審者だよ……
「Ｇ１１……タスケテ……」
　逆捕まえられた宇宙人状態で助けを求める。君だけが頼りだぜＧ１１！
「んー、無理ぃ」
　ああ、もう片手は埋まってるのね。４１６……Ｇ１１になついちゃったのね。いつの間に……
「ねえねえ、お菓子見てもいい？」
「あ、ぬいぐるみ。……なんでもない」
「よ、よし！買い物の最後にお菓子コーナーとぬいぐるみのコーナーに寄ろうか！」
「ほんと！やったー！」
　９は手をブンブンと振り、４５は少し手をにぎる力が強くなる。喜んで……るのかな……？
「私は……？」
「よし、まずは包丁見ようか！」
「ほんと……？じゃあお皿も見ていい？」

「いいよいいよ！」
「じゃ、じゃあ……グラスとお箸も？」
「ああ、いいぞ！」
　表情こそは変わってないけれど、その右手はブンブンと振られている。Ｇ１１がだるそーな表情をしてるけれど、それがまたなんだか凸凹姉妹って感じで似合っている。
「お似合いだね」
「それ、お兄さんが言う……？」
「やめろ……不審者を見るような目で俺をみるな……」
「そうじゃないけど……まあ、いいや。４１６のことも頼んだよ」
　そういってＧ１１は背中を見せて、手を振りながら店内へと消えていった。……消えていった!?ちくしょう逃げられたか！
「お、お兄さん……」
　だー！困ります！服の裾を掴まれたら困ります！
「わ、わかった。じゃあまず４５ちゃん！カート持ってきて！」
「は、はい」
「４１６ちゃん！まずは台所用品から見ようか」
「う、うん！」

「ねえねえお兄ちゃん!私は～?」
「9ちゃんは!9ちゃんは……」
やばいな……どうしようか。
「そ、そうだな……それじゃあ9ちゃんは45ちゃんのサポートだ!」
「了解!」
ビシッと敬礼して、45と一緒にカートを押しはじめる。仲の良い姉妹でなによりだ……。

＝＊＝＊＝＊＝

「この包丁も……いや、こっちの方が良い……でも値段が……」
この子食い入るように包丁を選んでるよ。
「416ちゃん?値段は気にしなくていいよ?」
なんたって、君のお父さんからもらった多額のお金が有り余っているからね。
「コスパが最高のモノを選ぶまで帰れないわ」
「そ、そうかい」
何度もコーナーを往復して、ようやく一本の包丁を持ってきた。

「これでいいの？他の包丁は？」
「これ一本あればたいていなんでも切れるから」
「ふーん」
　受け取った包丁を見る。ああ、有名なメーカーだから……ここらへんかな。おっあった。
「じゃあこれを買おっか」
「そ、それは……」
　俺が手に持ってるのは、包丁数本が入ったセットだ。４１６の持ってきた包丁もセットの中に含まれている。
　俺の家には一本しか包丁が無かったからな。こういう発想も与えてやれなかったかもしれない。
「でも無駄遣いはダメよ」
「じゃあ４１６ちゃんが存分に使って、無駄じゃなくしてくれるかい？」
「っ！……わ、わかったわ」
　顔を真っ赤にしながら、少しうつむいてしまった。
「わ、私が全部、しっかり使うまで料理する」
「そうかいそうかい」

やる気が出たようで何よりだ。お兄さんも思わずニッコリしてしまったよ。
「ねえ!お菓子コーナー見てきていい?」
「まあ待ちなって9ちゃん。皆で行こう?」
「うん!ほら、早く行こうよ45姉!」
「あっ待って……」
9が45の手を引いて菓子のコーナーへと歩いていく。
「416ちゃん、ゴメンね?」
「別に気にしないわ。それにいい食器もなさそうだし……」
そういいながらも手を握ってくる。ほんと君たち手をつなぐのが好きだねぇ。
「……もうちょっと力を緩めてくれない?少し痛いな」
「今度は……逃さないように……」
ははは、確かにさっきはG11に逃げられてたもんね。
「もう、お兄ちゃん遅いよ?」
っと待たせすぎたか……。9が戻ってきちゃったみたいだ。両手にはすでに菓子が抱えられている。
「ちょっと多くない?」
「でもね!ここが私の分で、これが45姉の分。それからこっちは416ちゃんの分!

それからそれから……これがＧ１１お姉ちゃんの分！」
「そうかそうか。いいよ、かごに入れて」
いい子かよ……。というかすでに４１６とＧ１１の好みも把握してるのね。いったいいつの間に？
「ねえねえ、あとはー？」
「うーん、そうだな」
布団……は重いから最後でいいな。食材も今日はいいだろう。あとは……
「ぬいぐるみ、だったね」
「え？いや、私のは……」
「……９ちゃん、連れてってあげて」
「りょーかいだよ！」
また９が４５の手を引っ張っていく。っと曲がり角から人が……！
「９ちゃん！危ない！」
クソッ遅かった！９が人にぶつかって後ろに倒れていくのが見える。その小さな頭は、衝撃に強くできているようには到底見えなかった。

「っとセーフ!」
　ま、間に合った……。ほぼ滑り込みでキャッチすることができた。
「ごめんなさい!怪我はないかしら!?」
「ええ、まあなんとか」
「本当にごめんなさいね」
　外人さんだろうか……?随分と長身で、それにしてはグラマラスなものをお持ちであった。髪を結んでいた大きな青いリボンはしばらく頭に残りそうだな……。
「9ちゃん、周りは良く見ようね」
「うん。お姉さんもごめんなさい」
「あら、いいのよ。子供は少し元気すぎるくらいがちょうど良いって言うもの」
　そういいながら、スマートホンを赤いポーチから取り出した。
「いっけない。私もういかないと。それじゃあ」
　そう言ってどこか行ってしまった。
「あっ……」
「416ちゃんどうした?」

「Ｇ１１さん、発見」
　そういって指差す方向には、ソファコーナーでだらしなく寝息をたてているＧ１１がいた。見つけたぞ。見つけたぞー！
「全員でおこしておいで。騒がしくしないようにね？」
「うん、わかった！」
「……うん」
「お兄さんがそういうなら……」
「よし、それじゃあＧ１１ちゃんに向けて、突撃ぃ」
　もちろん小声だ。相手は抵抗する間もなくチビ達に起こされる。まさに最強の布陣。
　そのあと、フロアに消え入るような悲鳴が響いたけれど、だれも見ていなくて助かった。

第十話　特別編　本当に……?

「は～疲れた」
「渚ちゃん、お疲れさま。まかないだよ」
「ありがとうございます、店長」
　私の目の前に、親子丼が出てくる。ついでにアルコール臭の漂う琥珀色の液体まで置かれる。これがもうたまらないんだよね。
「今日は特別いそがしっかったからね、サービスだよ」
「いいんですか!?ありがとうございます!」
　グラスに少し口をつければ、独特の風味と自己主張の激しいジンジャーの匂いが鼻から突き抜けていく。
　この目の前の親子丼も絶品。とろっとろの卵が鶏肉に絡みつき、未だ私にすら教えてくれない味付けによって、クドくなく舌に残る。この絶妙な味加減は店長しかできない。
　一介のバイトである私にここまで美味しいまかないを出してくれるのも、この店長の人の良さがあってこそだ。ありがたい。

「帰り道は大丈夫かい？」
「はい、慣れてますから」
こう見えて逃げ足には自信がある。やばい人にあったら速攻で逃げる、を徹底してるから大丈夫だ。抵抗はしちゃいけない。
「ごちそうさまでした」
手をあわせてふぅと一息をつく。アルコールも入ってて少し気分もいい。
「お粗末様でした。それじゃあ気をつけて帰るんだよ？」
「はい、店長。お疲れさまでした！」
トートバッグを持って店を出る。もう日付は変わっている。道を照らすのは街灯と、それから時折家庭から漏れ出ている光くらいだ。
スマホを確認すると、いくつかの通知とともに、あるゲームの通知が入ってる。
ドールズフロントライン
何かの広告で見て、可愛い女の子につられてホイホイインストールしてしまったゲームだ。内容を見てその世界観とのギャップ差で完全にドハマリしてしまって、いまや唯一しているソシャゲになっていたりする。
特にこれといって推しているキャラがいるわけでもない。でもそれは好きなキャラがいないわけじゃなく、みんなを平等に愛してるってスタンスをとっているだけなんだ

よね。
さっと後方支援だけ出して、スマホをしまう。夜道の歩きスマホは危ないからね。さて、今日はもう家に帰ろう。
淡く照らされた道を、私は歩き始めた。

＝＊＝＊＝＊＝

家の近くに来た時だった。珍しくこの時間だと言うのに話し声が聞こえる。声は二人分、女性みたいだ。
「ちょっと、こんなところでつぶれないでよ～」
「あなただって酔っ払ってるでしょ～?」
その2人はどうやらお酒を飲んでいるようだった。なんだか面白そうだな。
そっと近づいて、曲がり角に体を隠して聞き耳をたてる。
「……ふわぁ、ねむい～」
銀髪の子がそういって地べたに座り込んでしまった。
「ちょっと……、立ちなさいよぅ～」
茶髪の子が手を引っ張るが、その力は弱々しい。

「うっ……」
　あっ銀髪の子がうずくまって……？
「吐きそう」
「バカ！こんなところでやめてよね！」
「うっ……うっ……」
　どうやら飲みすぎて吐きそうらしい。急性アルコール中毒？だとまずいかもしれない。
「だ、大丈夫ですか？」
　幸いスポドリなら持ってる。もうぬるくなってるけれど、酔っぱらいにはちょうどいいでしょ。
「これ、飲めますか……？」
「口移しして～ん～」
　そういって銀髪の子は口を尖らせる。
「大丈夫みたいですね」
　すっと離れようとするけど、銀髪の子が腰に抱きついてくる。に、逃げられない……？
「だいじょう……b……うっ」

アニメだったらキラキラのエフェクトがでるんだろなーと思いながら真っ黒な空を見上げる。

ああ、これバイトの服装なんだけどなぁ。明日の夜もバイトなんだけどなぁ。

「その……相方がごめんなさいね?」

茶髪の子が心配そうに、そして申し訳なさそうに近づいてくる。

「気にしないです、家近いんで。それよりそっちは大丈夫ですか?」

「ん?」

見たとろこ……ここらへんの人でも無さそうだ。茶髪の子のスマホには、ここら一体の地図が表示されている。こんな何もない住宅街で地図をみるなんてよそ者ですっていってるのと同じだから気をつけたほうがいいと思うなぁ。

「私の家近いので、シャワーだけでも浴びていきますか?」

「いいの?それじゃあお言葉に甘えさせてもらうわ。ほら、行くわよ」

「んー?うっ」

「ああこら!吐かないで!」

再びキラキラのエフェクトが流れたのは言うまでもないかな。無事?に茶髪の子の服も汚れて、全員で私の家に向かうことになった。片付けておいてよかった……。

しかし……ずいぶんとクオリティの高いコスプレだなぁ。なんもない街中でやって

るのはすこし複雑な気分だけど。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

チュンチュン

こういう朝に限って、すずめの鳴く声がしっかりと耳に入る。

「あら？起きたの？」

「おはよう？」

２人が両側から耳元で囁いてくる。

「昨夜は……、楽しかったわ」

「まさかあんなことをする人だなんてね。私もつい熱くなっちゃった」

ついつい虚無顔を浮かべる。

２人がグイグイと身体を押し付けてくる。私の腕に、その豊満で柔らかいものが直接押し付けられる。そう、直接だ。

今、私は、狭いベッドで２人の美女に挟まれてる。その２人の美女は裸だし、私も裸だ。

「何が……あったんだっけ……？」

「あら？わすれちゃったの？」

「ふふふっ、あんなに可愛かったのに」

本当に昨夜の記憶がない。本当に覚えてない。だからＦＡＬ似の茶髪の子と、５７似の銀髪の子に挟まれて裸で寝ている理由がわからない。

「……あの、そもそもお二方はどなたですか？」

「あら？」

「わすれちゃったの？」

クスクスという笑い声が、両側から聞こえる。少し背筋がゾクリとした……。

「私はＦＡＬよ」

「私はＦｉｖｅ―ｓｅｖｅｎ。仲良くしましょう、渚ちゃん？」

随分とロールプレイにも気合が入った人たちだなぁ……なんて思いながら、私は起き上がる。

部屋の中は、まるで酔っ払いの酒盛りが行われたかのように、酒瓶とおつまみのゴミが散乱していた……。

せっかくの日曜日だというのに、まずは部屋の掃除からしなきゃいけないみたい。
「もう少しゆっくりしましょうよ～」
「ヒャン！」
５７が腰に抱きついてきて、なにかが背筋に流れた気がする。驚いてつい甲高い声が漏れてしまった。
本当に……酔いつぶれて寝ただけだよね……？

第十一話　これが布団の力

Ｇ１１を起こした俺たちは、あるコーナーで立ち止まる。
もちろん布団のコーナーだ。
「お兄ちゃん、お布団買うの？」
「うん、最近手狭になってきたからね」
４１６やＧ１１の家から持ってこれないかとも思ったが、２人ともベッドだとか。これは新しく買うしかない。ふかふかでいい感じのをな。
「それじゃあさ、これにしようよ」
そういってＧ１１が指さしたのは、この店で一番大きい布団だった。ファミリーサイズってなんだ？キングサイズまでしかしらないぞ？
「さすがにこの大きさはいらないでしょ」
「そう？でもベッドをどかしてこれ一枚の方がいいと思うけどなぁ」
「いやいや、それだと俺が寝る場所が」
「え？一緒に寝ればいいじゃん」
……は？

「お兄ちゃんと一緒？」
「お兄さんとなら……一緒に……？」
どうしてまんざらでもない顔をするの君たち？いや、犯罪だよ？
「よし、じゃあきまりだねー」
そういってスッと注文カードをカートに忍ばせる。
「いや、さすがにまずいでしょ？だって俺男だよ？」
「んー」
「……でも」
「お兄さんならねー」
ねーっと３人で顔を見合わせてるけど、何？俺なら無害って？これでも健全な１男子なんだけど？
いや、まあ危害加えるつもりもないけどさ。
「もう少し危機感をだね」
「だってお兄さんにかぎってそれはないでしょ」
再びねーっと３人で顔を見合わせる。いや、わかってくれてるのはありがたい気もするけど、なんか違う。さすがに９や４５や４１６には保護欲が湧くけれど……Ｇ１１はギリギリいけそうな気が……いや！いかないけどね

「それよりほら、早く帰ろうよぉ。私つかれた」
「はいはい。っとその前に」
　確かこっちのコーナーだったよな。そうそう、ここを右に行けば……
「……っ！お兄さん？」
「４５ちゃん、好きなの持っておいで」
　二度三度確認するかのようにこっちを見た後、４５は向こう――ぬいぐるみのおかれたコーナーへと歩いていく。
　うしろを見れば、羨ましそうに９と４１６がその後ろ姿を眺めている。ふたりとも既に自分の物を買ったから遠慮してるのかな……なんていい子たちなんだ。こうなったらかける言葉は決まっているよな？
「２人とも、行ってきていいよ。選んでおいで」
「えっ？」
「いいの!?」
　さあ行っておいで……金ならある。君たちの笑顔を見るのがおじさんの使命なんだ……。
「笑顔を見るのがおじさんの使命だーなんて思ってそうな顔してるね」
「Ｇ１１ちゃん、その的確な指摘はやめようか？」

「あはは、お兄さんはほんと面白いなぁ」
「……あのさ、俺ってそんなに無害に見える？」
「見える見える。だって私にそういう目線向けないもん。もちろんあの子たちにもね」
「……それは褒めてる？」
「半分ね～」
残り半分は何なんだ……。っと戻ってきたか
「えっと４１６ちゃんのは黒猫で、９ちゃんのは犬で……４５ちゃんのはうさぎか」
順当なチョイスで少し安心した。これで変な動物とかがきたら反応に困るからね。
「よし、それじゃあレジに行こうか」
はーいという返事とともに、レジへと並び始めた。
そのあと、レジで見たこともない金額を見て卒倒しそうになったのは言うまでもないだろう。まあもちろん財布に補充してきたから大丈夫だったけどね。

＝＊＝＊＝＊＝

さて、帰ってきたわけだが……。
「ベッドを片付けようか！」

「おー！」
　となりには9だけがいる。他の三人？食材の買い出しにいったよ。半分追い出した形だけどね。
「さて、9ちゃん」
「どうしたのお兄ちゃん」
「いや、怪我はしないようにね」
「うん！」
　よーしと気合を入れながら軍手をつける。推しが気合をいれて頑張ろうとしている。
　それだけで俺だってやる気が出てくるってもんよ。
「そこ、支えてて」
「うん！」
「このネジを箱に入れてくれる？」
「わかった！」
「よしっ、危ないからちょっとどいててね」
　よいしょっと解体したベッドの骨組みを部屋の隅にまとめる。ビニール紐をとりだして巻きつけて……
「9ちゃん、ここ切って」

「はーい」
　結んだ紐の端を切ってもらう。あまりにいい笑顔でハサミを向けるから、なんだか背筋に冷たいものが走っちゃったよ。
「よし、終わりだ！」
「終わり！」
「というわけで次は新しい布団だ！」
「布団だ！」
　圧縮された布団を開けば、部屋の半分を占拠する。
「これなら十分寝られそうだな……」
「わーい一番のり！」
　広がりきった布団に9が飛び込んでいく。その小さい身体を優しく受け止める。
「お兄ちゃんもおいでよ」
　足をパタパタさせながら9が布団の上から呼んでくる。まあまてまて、ゴミを片付けたり敷きパッド敷いたりまだいろいろとすることが……
「でもまあ感触を確かめるくらいはいいよね」
　ふかふかの布団が身体を沈ませる。ああ、これが布団か……布団のちかｒ……

３人が帰ってくるまでのあいだ、俺は久しぶりに熟睡できたのだった。

第十二話　俺の勝ち（プルプル）

突然、本当に突然だった。
意図せずして、早朝に、スマホから大音量で流れ始めた。
「ん～どうしたのお兄ちゃん……」
「9ちゃん起きちゃったか。まだ朝早いし寝てていいよ」
「う……ん。そうする」
9が再び寝付いたのを見て、俺はスマホの画面を見る。
そこには、大雨の緊急速報を伝える通知が届いていた。
幸い、近くに大きな川はない。よほどでない限り、被害がこっちに及ぶことはないはずだ。
「……災害用の持ち出しバッグ、どこにしまったかな」
誰も起こさないようそっと起き上がって、玄関先までいく。
たしか靴箱の中に……
「あったあった」
リュックを取り出して中身を見る。非常食と固形燃料や断熱シート、それから携帯ト

イレがそれぞれ一人分しか入っていない。
まだ布団で眠る４人の方を見る。
今度買い足しておくか……
寝直そうかと戻ると、ギュッとシャツの端を掴まれる。
どうやら４１６が無意識に掴んだみたいだ。父親がいなくて寂しかったりするのかな？
無理に引き剥がすこともないだろう。そのまま再び眠りについた。

＝＊＝＊＝＊＝

トントントン
規則的な音で目が覚める。４１６が料理をする音だ。毎朝聞くお陰でこのリズムが心地よくなってしまった。
「おはよう、４１６ちゃん」
「おはよう、お兄さん。もうすぐできるわ」
「わかった。手伝おう」
よっこいせと起き上がるが、まだ４５と９とＧ１１は寝息をたてている。Ｇ１１はと

もかく、４５と９が俺よりも長く寝ているのは珍しいかもしれない。
「手伝ってくれるんじゃないの？」
「ああ、すぐいくよ」
　と思ったが……４５と９が俺の足を掴んでいる。
「……どうしたの？」
「いや、それが……動けないんだ」
「それ、起きてるわ」
　いや、まさか……
　と思って少し足を動かす。すると、足を掴む力が強まった。これは確実に起きてるな……？
「４５ちゃんに９ちゃん、離してくれないかい？」
　２人は何も言わず、俺の足を掴む手を強める。
「いや、起きてるね！２人とも！」
「バレた！４５姉！」
「うん、９！」
「うわっバカヤメロォ！」
　そんなに引っ張られるとバランスがぁ！倒れるわけには、倒れるわけにはいかない！

「うごごごごご」
全腹筋背筋をつかってバランスを保つ。倒れるわけには……まだ眠っているＧ１１の上に倒れるわけには……
「残念、私も起きてるよ」
もう、耐えたよね……。もう倒れていいよね……。
なあＧ１１……首元を引っ張るのは卑怯だよ。
俺が布団に倒れ込むのに、それほど時間はかからなかった。いや、首元に抱きつくな！４５と９も腰を掴むな！
「４１６！」
「いまだよ！」
４５と９がそう言うと、背中に衝撃がくる。
よつん這いで正面にはＧ１１がいる。４５と９は腰に抱きついてきてるし、どうやら４１６が背中に乗っかってるみたいだ。
「いくよ９！」
「わかったよ４５姉！」
「君ら俺の動きを封じて何をする気？いや、待て、４５ちゃんに９ちゃん、横腹はヤメ、ヤメロオオオ！」

この後笑い疲れるまでくすぐられ続けた。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

「暇だね～」
「そうだね～」
雨が振り続いていて、部屋の中もジメジメしている。でも……風上の方は晴れているから、そのときに買い物でも行こう。
「ねえお兄さん」
背後から突然４１６が話しかけてきた。話しかけてくるのは珍しい。
「ん？どうしたんだい４１６ちゃん」
「なにか嫌な予感がするの」
「嫌な……予感？」
「そう、なにか良くないことが――」
４１６の声は大きな音にかき消された。ズドーンと言う音は空気を震わせる。その後も何度か鳴り続ける。
「か、雷か。随分と近いなぁ」

窓の方を見れば、キレイに稲妻が見えた。
「えっと、その」
「ん？４１６ちゃんもしかして雷は苦手？」
４１６の手は俺の服の裾をギュッと握っている。
「そ、そういうわけじゃな――」
４１６の言葉は途中で止まった。窓の外が光ったからだろう。少し遅れて大きな音が響き渡る。
「ひ、ヒィッ！」
いや、怖いんだね。いいよいいよ、お兄さんに任せなさい。ああでも服の後ろが伸びそうだ。まあ部屋着だから構わないけれどね。
再びズドーンと近くに落ちる。これは停電の可能性も考慮しておく必要がありそうだ。
「お、お兄さん……」
「４５ちゃん？」
「か、かみなり、ズドーンって……」
４５もうさぎのぬいぐるみを抱きしめながら４１６の反対側……つまりは俺の正面から突撃してくる。まいったな、最近身動きが封じられがちだ。あぐらをかいているか

ら、すぐに動けなかった。
　ピカっと外が光り、すぐに音が聞こえる。どこからか消防車のサイレンすら聞こえてくる。
「……どうしたの9ちゃん？」
「お兄ちゃんってさ……」
　またピカっと外が光る。
「実は雷苦手？」
　直後、ズドーンと音がする。
「ままま、まさかそんなわけないじゃないか」
「でも落ちる度に身体がビクってなってるよ？」
「そんなわけ……っ！」
　また落ちた。ああ、たしかに苦手だよ！でも雷の怖さというより、爆音が苦手なんだよ！
「そういう9ちゃんは楽しそうだね」
「えっ？楽しいじゃんいつもと違ってさ！」
　9は目をキラキラさせながら窓に張り付いている。元気だな……これが若さか。
「これが若さかって顔してるよ」

「Ｇ１１ちゃん……は平気そうだね」
「さすがに怖がるような年齢じゃないよ。それにコレくらいの音、慣れてるし」
そう言いながら、Ｇ１１は大きくあくびをした。
「何もできなさそうだし、私は寝るね」
Ｇ１１はおもむろに近づいてくると、俺の膝を枕にして寝息を立て始めた。いや、動けへん。さらに動けなくなったやん。
「ずるーい！じゃあ私は逆側！」
そういって９は逆側の膝を枕にして寝転がった。うぉん、俺はまるでフルアーマー４０４だ。なんてくだらないことを考えるくらいしかできなかった。
さあ俺の足に限界がくるのと停電と、どっちが先か勝負しようじゃないか。

ピカッズドオオオオン！

部屋の照明が消える。勝負は案外と早く決着がついたのだった。

第十三話　想像通りだ

「晴れた～！」
「9ちゃん、転ばないようにね」
　9が道をかけて行く。どうやら雨ばかりで退屈してたみたいだ。毎日外で遊びたいってタイプなんだろうなぁ。
「お兄ちゃーん！早くー！」
　道の先から9がそう叫んでくる。まったく、若いなぁ。俺もそんな老けてるわけじゃないけどさ。
「足元に気をつけるんだよ！」
「うん、分かった！」
　ああ、そう走ると……ほら、水たまりに突っ込んだ……。
「足元を見ないから……まったく」
「あはは、ごめんなさ～い」
　タオルで汚れた足を拭いてあげる。こんな細い足でよく動き回るなぁ。
「よい……しょっと」

「ちょっと9ちゃん、何をしているんだい？」
「肩車！」
「肩車か、よ～し」
　もってくれよ！俺の足腰！
「わー！たかーい！」
　9はどうやらお気に召したようで、キョロキョロとあたりを見回してるようだ。楽しそうでなによりだよ。
「ねえねえお兄ちゃん」
「ん？何だい？」
「ありがと！」
「ははは、どういたしまして」
　お礼も言えるなんて偉いなぁ。ほんと、その一言が言えるまま大人になるんだよ、9。
「……あれ？お兄ちゃんあれ見て」
「あれは……雨雲？」
　そういえば雨の前にする特有の匂いもする。早めに帰らなきゃいけないな。流石に濡れたくはない。
「少し急ごうか」

「うん、わかった！」
９を肩車したまま、早歩きする。これは明日に響きそうだ……。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

少し買い物が長引いたのだが、幸運なことにまだ雨は降っていなかった。
「お兄ちゃん、荷物１つ持つよ」
「ああ、ありがとう」
それじゃあこのお菓子たちを頼んだ。軽いし大丈夫だろう。
「それじゃあ帰ろっか」
「うん！」
９は元気よく頷くと、また走り出す。
「急いで帰ろう！雨が降る前にさ！」
９がそう言って振り返った瞬間だった。
ザーーーッ！
バケツをひっくり返したかのような土砂降りが始まった。
「やべえ降ってきた！」

「お兄ちゃん急ぐよ！」
食品が濡れるだとか水溜まりで足が濡れるとか考えている場合じゃねえ！このゲリラ豪雨はひどすぎる。幸い、家までもうすぐだ！
「ただいま！」
９の元気な声が玄関に響く。
「９！大丈夫だった！」
パタパタと部屋から出てきたのは４５が一番早かった。
「うん！でもビショビショになっちゃった」
「ほら、拭いてあげるから荷物下ろして」
濡れたままの買い物袋が玄関に置かれ、９はそのまま風呂場へと連れて行かれた。
「おかえりなさい。はいタオル」
「ただいま、４１６ちゃん。ありがとう」
４１６が持ってきてくれたタオルで簡単に買い物袋を拭いて、それから自分の足を拭く。
「お兄さん、今日は肌寒いからお風呂で温まった方がいい」
「そうだね……」
今日はやけに気温が低い。連日の雨に加えての曇り空で空気が冷えてしまっている

みたいだ。
「よし、９ちゃん！お風呂に入っていいよ！」
「えっほんと!?」
こういうときのために常に清潔にしているのだよ。まあ最近は４１６ちゃんが勝手に掃除してたりするけれど。
「じゃあさ！」
９ちゃんが脱衣所からひょっこり顔を出す。
「お兄ちゃんもいっしょに入ろうよ！」

さすがにまずいのでは？

＝＊＝＊＝＊＝

全指揮官に告ぐ。ワレは悪くない。ワレは何も悪くない。たとえ同じ湯船に９がいて、よりかかられてるとしても、俺は悪くねぇ！
そう、仕方がなかったんだ。涙目で９に

「お兄ちゃんは私と入るの嫌？」
　ってせがまれたから仕方がなかったんだ……。
「ふんふ～ん」
「ご機嫌だね」
「だってお兄ちゃんとお風呂だよ！楽しくないわけがないじゃん」
　目の前で頭の上のお団子が揺れる。普段のツインテ９もいいが……このお団子９もいい……。諸兄姉、ここが天国だ。俺は一足先に天国に行ってしまったみたいだ。
「ねえねえお兄ちゃん」
「なんだい９ちゃん」
「最近雨ばっかでつまらないね」
「そうだね。９ちゃんは外で遊ぶのは好き？」
　９は元気よく頷く。
「うん！でも４５姉とか４１６ちゃんとかＧ１１ちゃんとかと遊ぶのも好き」
「そっか……」
　どこか外に出かけるのもいいかもしれない。探してみるか。
「じゃあ今度、皆でどっか出かけようか」
「ほんと!?」

９がバっと立ち上がってこっちに振り返る。
「じゃあ私４５姉たちに言ってくる！」
そのままバタバタと風呂から出ていってしまった。
うん、はしゃぐのはいいけど恥じらいを覚えようか……。

＝＊＝＊＝＊＝

「お兄さん、遅い」
「ごめんねＧ１１ちゃん」
風呂から上がると、Ｇ１１がパソコンの前を占拠していた。その両隣は９と４５が、後ろから覗き込むように４１６がパソコンを見ている。
「何を見ているんだい？」
「ここらへんの観光地」
確かに上から覗き込んで見れば、ここらへんの観光地をいくつかタブで開いている。
「どこか行きたいところがあるのかい？」
「うん！私と４５姉はここ！」
そう言って指差したのは、公園だった。広い公園で、動物がいたり遊具があったり、花

壇があったりと盛りだくさんだ。少し遠く、電車移動になるだろう。
「私はここにいきたいかな」
次にＧ１１が見せてきたのは、滝だった。家からはたしかに近いが、歩いて行く距離でもない。これはバスだな……。
「意外だね、Ｇ１１ちゃんはインドア派だと思ってたよ」
「あっいや……えっとそうなんだよ～」
目が泳いでいる。まあ、滝のマイナスイオンを浴びながら昼寝したいってところかな。リクライニングできるアウトドアチェアの通販サイトも開いているし。
「それで、４１６ちゃんは？」
「私は別に……それよりお兄さんは？」
「自分はとくにないからいいよ。どこにも行きたくないって訳じゃないんだろう？」
なんとなく４１６の行きたいところは想像できていた。きっと静かな場所で、夜か夜のような暗さがあるところだな……
「じゃあ……この水族館」
そういって４１６は画面を指差した。
うん、ピッタリだ。

第十四話　こっちを見るその目は何？

「すごーい！ひろーい！」
「待って……９……！」
公園に入るなり９が目の前の広大な芝生を走り回る。４５も心なしか声が陽気がかっている気もする。
「お兄ちゃんも早くー！」
「ああ、今いくよ」
俺は後ろを振り返る。そこには右手にバスケットを持ってトテトテと歩いている４１６がいる。その左手は、しっかりとＧ１１の手を握っている。
「何ですかお兄さん」
「楽しみだね」
「まあ、そうですね」
そうクールに言う４１６も、さっきまでは鼻唄混じりに歩いていたんだぜ……可愛いだろ？
ここまでの移動は電車だった。ずっと眠りっぱなしのＧ１１に変わって俺が全員の

面倒をみなきゃならんのは疲れたが、まだまだ一日はこれからだ。
「ねぇお兄ちゃん!」
「どうしたんだい９ちゃん」
　先に行っていた９が唐突に振り返った。
「楽しいね!」
　満面の笑みを浮かべながら、９はそう言う。
　ああ、すでに楽しい。準備して、みんなで移動して、そしてみんなで公園に到着した。
それだけで、十分楽しい。でも……
「まだ公園に入ったばかりだよ。もっと楽しいことがたくさんあるさ」
「うん、楽しみ。アレなんだろう?行こう、４５姉!」
「う、うん」
　９と４５が遠くへ行ってしまいそうだ。でも４１６から離れるわけにもいかない。
「いいよお兄さん。９ちゃんと４５ちゃんに付いて行って」
「いいのかいＧ１１ちゃん?」
「私だって子供の面倒くらいみきれるよ」
　少し不安だが……子供２人だけでどこか行く方が不安か。
「わかった、任せたよＧ１１ちゃん」

「うん、任せてよ……フワァ、ねむっ」
　Ｇ１１が大きなあくびをした。やっぱり不安があるが、今は９と４５を追いかけるのが先か……。

＝＊＝＊＝＊＝

「あはは！お兄ちゃんこっちだよ！」
「そう簡単には……捕まらないよ！」
「はぁ、はぁ、待ってくれぇい！」
　子供の体力は化け物か!?延々と走り回ってまだ疲れ知らずだなんて、これが若さか。いや、俺も十分若い部類に入るけれども。
「鬼さんこちらー！」
「お兄さんの黒歴史ノート第一章ー！」
　ちょっと待って４５が手に持っているあのブツは……
「４５ちゃん、どうしてそれを持っているんだい？」
「私も持ってるよ、第二章」
「９ちゃんまで!?」

「ばらまかれたくなかったら」
「私たちを捕まえて?」
　ふーん、大人げないと思ってセーブしていたが……どうやら本気を出す時が来たようだ。
「9ちゃん、45ちゃん……大人との差っていうのを思い知らせてあげるよ」
「あはは、怖ーい」
「でも、私と9の両方を捕まえることなんてできるかな?」
　やってやろーじゃねーか!
「行くぞー!」
「わーっ!」
「逃げろー!」

　この後、俺が息切れするまで走り回ったのは言うまでもないだろう。もちろん、勝敗は負けだった。俺……弱すぎ?
「あー走った走った!」
「さすがに……疲れた」
　しばらく走り回ったり遊具で体を動かした後、2人とも満足した様子で駆け寄ってく

る。

やれやれ、もう太陽はてっぺんを少し通り過ぎちまったようだ。気温も随分とあがってきた。

「よし、お昼にしようか」

９と４５の手を引きながら、４１６とＧ１１のいる木陰へと足を向けた。

＝＊＝＊＝＊＝

木陰では、案の定横になって寝息を立てているＧ１１がいた。４１６はそのすぐ側で座り、本のページをめくっている。そばに置かれたコップには、カフェオレが注がれていた。

「遊びは終わりですか？」

「ああ、十分動いたかな。そろそろお昼にしようか」

「ええ」

４１６は大事そうに側に置いていたバスケットを開く。９と４５は、我先にとその中身を覗き込んだ。

「わー！サンドイッチだ！」

「他にも一杯……」
バスケットの中には、色とりどりの料理が並んでいた。朝早くから起きて俺と４１６で作った自信作である。
「美味しい!すごいよお兄ちゃん」
「いいや、俺じゃないよ」
実際、この豪華な弁当を作ったのは俺じゃない。俺は指示通りに手伝っただけだ。
「これは４１６ちゃんが作ったんだよ。ほぼ1人でね」
９と４５の視線が俺から４１６へと移動する。その視線から逃れるように、４１６は顔を逸らした。
「すごーい!４１６ちゃんこんなにいっぱい作ってくれたの!」
「すごい……わ、私にも今度教えて!」
「う、うん」
「ほんと……!?」
「じゃあ私も!私も料理する!」
「それじゃあ、私が試食役をしようか」
「Ｇ１１さんはそろそろ料理できるようにならないといい人を見つけられないよ?」
「ぐっ、４１６ちゃん痛いところをつくね……」

あはは、４人とも仲が良さそうで何よりだよ。こんな尊い空間にいられるか！俺はフェードアウトさせてもらう！

「お兄ちゃん？」

「私たちの……料理」

「全部食べてくれますよね？」

もってくれよ、俺の胃袋！

ああわかったよ！全部残らず美味しく食べてやるさ！

「料理……睡眠……そうか、料理上手な彼氏を捕まえれば……」

ボソボソ呟きながらＧ１１が何かを思いついたようだけど、俺は何も聞かなかったことにした。

第十五話　容量よ、持ってくれ

「見てみてお兄ちゃん、インコだって！」
「ははは、インコだね」
「あっち、モルモットだって！」
「９ちゃん、楽しそうだね」
　お昼を食べ終わったあとに向かったのは、動物園のスペースだった。パンフレットを見る限りだと、思ったよりも多くの種類の動物を飼育しているようだ。
「うん！ほら、いこっ４５姉。あっちに孔雀がいるんだって！」
「待って、９……」
　おっと白鳥に迫られて４５が固まっているぞ。まずは一枚パシャリ。
「見よ、これが財力だ！」
　近くの自販機でかった餌で、白鳥を一本釣りだぜ。
「……あれ？」
　白鳥のやつ、俺の手と４５とを見比べて……４５の方を向きやがった。
「ふぇ……お兄さん……助けて」

ああまったく、どうして白鳥は餌につられないんだ！まったく……あれ？４５の手に俺のと同じものが握られてるな……

「４５ちゃん！それ投げて！」

「……！ナイン！」

「４５姉ナイス送球！」

思いっきり投げた先には９がいて、その餌をアクロバティックにキャッチする。

もちろん、白鳥は餌をキャッチした９をじっくりと眺めていた。

「へへ、とれるもんならとってみろ――！」

「９ちゃん危ないから投げて！」

「大丈夫だよお兄ちゃん！」

ああ、白鳥が羽を広げて９に突っ込んで……

……つっこんで跪いた？

「えへへ、いい子いい子」

９は右手で餌を与えながら、左手で白鳥に触れている。

「４５姉もおいでよ！ふわふわしてて気持ちいいよ！」

「えっと……」

４５も恐る恐る近づいて、その羽根に手を飛ばす。さすがに人馴れしているようで、

白鳥が暴れる様子もない。
「お兄ちゃんもおいでよ」
「お兄さん、この子のさわり心地すごくいいよ」
やれやれ、お呼びとあらば
俺は一枚パシャリと写真をとって、白鳥に近づいていった。

＝＊＝＊＝＊＝

「４１６……ちゃん……？」
「なにかしら」
「そんなに興味があるのかい」
「まあ、そうね」
４１６が足を止めたのは馬のスペースだった。数種類の馬が、柵の中で放し飼いにされている。そんな中、４１６は柵にしがみつくようにして見つめている。
「……Ｇ１１ちゃん、４１６ちゃんのこと頼めるかい？」
９と４５が少し先の方へと行ってしまっている。しかしここで４１６を一人おいていくことはもちろん、無理をいって一緒に次の場所へと向かうのもできればしたくな

い。
「うん、わかったよお兄さん」
不安でしかないが、今は大人なＧ１１を信じるしかないか……。
あれ、デジャヴュな気が
「お兄さん？早くいかないと９ちゃんと４５ちゃんが」
「わかったよ。頼んだからね！」
近くのベンチに座り込むＧ１１を横目に、俺は９と４５の後を追った。

「見てみて４５姉！モルモットだって！」
「……かわいい」
小さな小屋をもそもそと動くモルモットを、二人は窓から覗き込むようにして見ていた。
確かパンフレットによれば……あと数十分後にはふれあい体験があるな。少し回ったら戻ってくるか。
「ねえ４５姉、あっちにはフラミンゴだって！」
「あっモルモット……」

９はすぐに次の場所へと走っていってしまった。４５はモルモットと９と見比べている。

「４５ちゃん、あとでまた来ようか」

「お兄さん……うん、わかった」

４５は安心したかのようにパンフレットを握って、９の手の振る方へとかけていった。

まったく、手のかかる姉妹だこと。

他にも数種類みたあと、４１６のいたエリアへと戻ってきた。もう少ししたらモルモットとのふれあいの時間も始まるから合流しようとしたのだが……

「ど、どうしようお兄さん……４１６ちゃんがいなくなった」

「……えっ？」

俺たちを迎えてくれたのは、珍しく眠たさげな表情が見られないＧ１１だった。

＝＊＝＊＝＊＝

「くそっ見つからないか」

動物園の園内を回っても、４１６の姿は見つけられなかった。

「すみません、ここにこのくらいの小さい子が来ませんでしたか？」
「いえ、来てませんね。迷子ですか？」
迷子センターを兼ねている本部に行っても、４１６は見つからなかった。本部の人はすぐに無線をつないで、各所のスタッフに連絡をし始めｒう。
「お兄さん……ごめんなさい、私が目を離したから……」
「いや、Ｇ１１ちゃんは悪くないよ。それに４１６ちゃんが勝手にいなくなるような子ってわけでもないし」
だが、嫌な予感はしなかった。誘拐だとかなんだとか心配するべきなんだろうけど、そうじゃないってどこかで思っていた。というよりもそう願っていたのかもしれない。
「すみません！迷子を探してたのはあなたですか!?」
スタッフの一人が息を切らしながら近寄ってきた。はいと肯定すると、ついてくるように言われる。
案内されたのは、馬の厩舎だった。
「ああ、こんなところにいたんだ」
そこには、馬の寝床ですやすやと眠る４１６がいた。
「すみません！この子、キラキラとしたものが好きなもので、その子を連れてきちゃったようで」

馬の頭を無理やり下げながら飼育員さんも深々と頭を下げる。
「いえ、いいんです。無事のようですし」
それに、４１６の髪はたしかに光をよく反射して煌めいている。
ほっと安心したのも束の間、時計を見れば想定以上に過ぎている。
「ふれあいの時間は終わっちゃったか」
「そ、そんな……」
４５の手に力がこもる。残念だが今日はまだまだ行くところもある。諦めてもらうしか……
「ああ、モルモットとのふれあいですか？それでしたら……」
飼育員さんはいくつか連絡をとりあうと、こちらに向けて笑顔を向けてくる。
「今回は特別に開放しましょう。迷惑をおかけしましたし」
「えっそんなお手数をおかけしてさらにそんなしてもらうなんて」
いえいえ、大丈夫ですという飼育員と、期待するかのように裾を掴んでくる９と４５。
それから目をこすりながら起きた４１６を見て俺は肩を下ろす。
「すみません、それではお言葉に甘えさせてもらいます」
このあと、写真フォルダがあふれるくらいにモルモットと皆を撮りまくった。

第十六話　あと数本手があったらなぁ

辺りが暗くなり始めたころ、俺たちは公園をあとにしていた。
「見てみてお兄ちゃん！水族館だ！」
９が４５の手を引っ張りながら、入り口に向かおうとする。待て待て、早まるな。まだチケットを買ってない。
「大人二人子供三人お願いします」
「はい、どうぞ」
金を支払ってチケットを受け取ると、４１６と手をつないだＧ１１にチケットを二枚渡した。
「ごめんＧ１１ちゃん、４１６ちゃんは任せた！」
「……わかった、なにかあったら連絡する」
あれ……？電話番号すら教えた覚えはないんだが……Ｇ１１のスマホには俺のＬＩＮＥが映っている。まあ細かいことはいいや。
俺は入り口で係員に止められてる二人の茶髪コンビに、急いで駆け寄っていった。

＝＊＝＊＝＊＝

「わぁ……綺麗……」

暗い水族館内で子どもたちはてんわやんわ動く。何度分身したいと思ったことか……

４５はまだいい。問題は９のほうだ。目を離した隙にすぐにどこかに行っている。そんな９でも、足を止めるのがいくつかあった。

薄暗い空間を、水槽の中を照らす光が照らす。ゆっくりと流れる水槽内を、クラゲが漂っていた。４５のペースに合わせてようやく追いつくと、９はその水槽の前でかじりつくように眺めていた。

「あっ４５姉！見てみて！」

「なに？」

「自分で光るクラゲだって！ほら！」

先程の水槽の隣に、小さな水槽がある。どうやら珍しいくらげがいるようだった。俺は二人の様子を眺めながら、大きな水槽の向かい側にある椅子に座る。程よい暗さ、静かなＢＧＭ、絶妙な空調……

「お兄さん？」

「……、はっ！」
やばい居眠りしかけてた。見れば４５が心配そうに顔を覗き込んできていた。
「９ちゃんは？」
「９なら先にいっちゃった」
「そうか……」
迷子にならないといいんだが……、９なら大丈夫かな。
「ほら、お兄さん。早く行こう？」
「ああ、わかったよ４５ちゃん」
珍しくも４５がせかして、腕を引っ張ってくる。この先はたしか……パンフレットを見れば、珊瑚礁のコーナーだった。

＝＊＝＊＝＊＝

珊瑚礁のコーナーは、とても広くつくられていた。４５はその一つ一つの水槽を、丁寧に見て回る。
「……４５ちゃん？」
そんな中でも、最もとどまった時間が多かったのはカクレクマノミの水槽だった。

「クマノミが好きなの？」
「うん……なんか、ほっとする」
　安心する場所を求めてるってことなんだろうか。たしかに実家には十数日も帰っていないわけだし、軽いホームシックになっているのかもしれない。おばさんに連絡をいれておいたほうがいいかもしれないな。
「……、お兄さん？」
「ああ……、そういえばそろそろペンギンのショーがあるね、行こうか」
「うん……」
　４５と手をつないで、９を探す。少し行ったところで、亀とにらめっこをしていた。ペンギンを見に行こうというと、９は目をキラキラさせながら俺の手を引き始める。
「っと……ちょっとまってふたりとも」
「ん？」
「どうかしたの？」
「いや、４１６ちゃんとＧ１１ちゃんにも連絡をしておかないとね」
　メッセージアプリを立ち上げると、ペンギンのショーを見にいくことを伝える。すぐに既読がついて、すでに場所をとっていると返ってきた。
「もう行ってるみたいだ。よし、行こうか」

二人に引っ張られるようにして、ペンギンのいるフロアへと向かった。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

ショーが終わりペンギンが寝床に戻っていくまで、ちびっこ3人は終始興奮していた。G11ですら、眠たそうな顔をしてはいるものの、目はしっかりとテクテク歩くペンギンを凝視していた。

「すごかったね！すごくかわいかったね！」

「一番、はじっこの岩に乗ってた子が、こうキョロキョロって」

「そのあと係員さんから逃げたりして――」

その後も三人は興奮して話しっぱなしだった。ペンギンのかわいさにまさに夢中といったところか。

「お兄さんも楽しめた？」

「G11ちゃん……、もちろんさ」

「なら良かった。ちょっと疲れてそうだったから」

ペンギンのフロア近くの水槽を眺めていると、G11が隣に寄ってきた。

「G11ちゃんはどうだい？」

「ん？ちょっと眠いかな」
「いや、そうじゃなくて。今日は楽しかった？」
「何言ってるのお兄さん」
　Ｇ１１はにへらぁと笑った。
「お楽しみはこれからでしょ？」
「えっ？」
「イルカショーもまだだし、その前にある大水槽でのショーも面白そうだよ？」
「へえ、意外だな」
「……、それってどういう意味？」
　すこしムスッとした顔をしたＧ１１にあわてて弁明する。
「ごめんごめん、普段はいつも眠たそうにしてるからさ。こういったことにも興味がなかったらどうしようってずっと考えてたよ」
「そりゃ私だって女の子だし、こういう雰囲気のあるところは嫌いじゃないというかなんというか」
「ん？どういうことだい？」
「……、な、なんでもない。それよりほら、次のショーの場所取りしてくるから！」
　やけに慌てて向かっていったなぁ。ラブコメとかだったらきっとＧ１１は顔を真っ

赤にしてるんだろうけど、まあそんなことはないか。

それに、４１６ちゃんの世話まで放棄していきやがった……。俺の手は二本しかないんだぞ……？ああ、ほら。取り合いが始まった……。

第十七話　俺が起きとかないとな……

左手を４５、右手を９、そして服の裾を４１６に握られるというフルアーマー状態の俺は、大水槽の前まで移動してきていた。
「お兄ちゃん！　はやくはやく！」
「はやくいきましょう、お兄さん」
「待ってくれよ……」
急かすＵＭＰシスターズに手を前に引かれ、マイペースに歩く４１６に服を後ろに引かれる。
「あっお兄さんこっちこっち～」
大水槽の前でＧ１１が手を振っている。まだ十分ほどショーまで時間があるというのに、すでにベンチはもう一杯だった。Ｇ１１もバッグをつかってなんとか二人分ほどのスペースは確保できているくらいだった。
「詰めればギリギリ座れるかな？　俺は空いてる二階のスペースにいるよ」
そういって俺はＧ１１にすべてを任せて行こうと思ったが……三人は離してくれなかった。

「ねえ、お兄ちゃん」
「お兄さんがＧ１１さんの隣に座れば」
「スペースの問題は完璧ですよね？」
「ど……どういうことだい？」
　困惑してる間にも、俺はぐいぐいとＧ１１のほうへと運ばれていく。
「ほら、まずお兄ちゃんが座って？」
　９のいうとおりに、Ｇ１１の隣に腰掛ける。
「そして、私と４５姉が～」
　そういいながら、４５と９が俺の太ももにのっかってくる。４１６は既にＧ１１を椅子代わりに座っていた。

　その後のショーは大水槽を活用した素晴らしいものだったが、それよりも両脚の上でもぞもぞする二人の動きがくすぐったくてそれどころではなかったのは言うまでもない。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

「お兄さん？」
「ん？　どうしたの４５ちゃん」
　まだ行っていない水槽を回っていると、４５が俺の手を握ってくる。
「大丈夫？」
「うん？　……大丈夫だよ」
「そう……良かった」
　疲れてるとでも思ったのかな？　優しい子だ。
「なに話してるの？」
　先に行っていた９が戻ってきて、４５とは反対の手を握ってくる。君たちナチュラルに手を繋ぐようになったね……。まるでそこが定位置かのように……。
「ううん、なんでもない。それより９、どこまで行ってたの？」
「お土産屋さん！　あのね！　こんな大きいぬいぐるみがあって」
　小さい手を精一杯伸ばしながら説明する姿はとても可愛らしいのだが、少し待ってほしい。もしやその大きさのぬいぐるみをねだる気か……？　その大きさはウチの家には大きすぎるぞ……？
「９、そんなに大きくても困るだけでしょ？」
「う～ん、言われてみればそうかも？」

４５は賢いなぁ。それに９は４５の言葉を一番よく聞くから、本当に助かる。
「そうでしょ？　お兄さん」
「えっああそうだね」
「ちゃんと話聞いてた？」
「ごめんごめん」
考え事をしていて、あまり聞いていなかった。
「えっと、ぬいぐるみだっけ？　いいよ、好きなものを買って。みんなで一つずつね」
「ほんと!?」
９がくいついてくる。４５も、嬉しそうにしているのが隠しきれていなかった。目がキラキラしている。
「ショップはイルカショーのあとも空いてるからその後でいい？　そのほうがゆっくり買い物できるから」
「うん」
「わかった」
二人とも、ぬいぐるみのことを話しながら、イルカのブースへと歩いていく。
「ねえお兄さん」
「Ｇｌｌちゃん？」

だいぶ後ろにいたはずの４１６とＧ１１が、いつの間にか真後ろにまで来ていた。
「ぬいぐるみって私もいいんだよねぇ？」
「君は大人だろうに……まあいいよ」
幸い、お金なら十分にある。思い出の品として買うのもいいだろう。
「お兄さんは何が好きなの？」
Ｇ１１の手をにぎる４１６がそう尋ねてくる。好きな動物か……。
「イルカとか？」
「イルカさん……」
そう聞くやいなや、４１６はＧ１１を引っ張り始める。
「ちょっどうしたの４１６ちゃん」
「早く行かないと」
「まだショーには時間があるだろうに」
気を使わせちゃったかな？　子供にそうさせるなんて、俺はまだまだだな。
「４１６ちゃん、急いで転んでも意味がないから慌てなくていいよ」
「でもお兄さん、イルカが」
「ああ、好きだよ。でも４１６ちゃんが怪我するのは嫌だな」
「……わかった」

「よし、えらいね」
髪を崩さないようにポンポンと頭を撫でる。４１６ちゃんはちょっとうつむきながらＧ１１の後ろに隠れてしまった。
「お兄さんさぁ」
「ん？」
「やっぱなんでもない」
Ｇ１１の言葉に疑問符を浮かべてしまう。ため息をつくことはしてないと思うんだが……。
「それより、二人が待ってるんじゃない？」
いつのまにか、先を行っていた４５と９の姿が見えなくなっていた。
「ごめんＧ１１ちゃん、任せるよ！」
「はいはい」
早く行けとばかりにひらひらと手をふるＧ１１に見送られながら、僕は二人を追いかけた。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

再び４５と９と合流し、水槽を回る。なんとか、イルカショーまでには余裕を持って回り切ることができた。
「楽しみだね！」
「うん」
ふたりとも、いまかいまかとそわそわしっぱなしである。
「あっいたいた」
Ｇ１１と４１６も無事に合流した。４１６が少し回るペースが遅かったから心配したが、聞いてみればじっくりと全部見てきたらしい。間に合ってなによりだ。
時計を見れば、もうすぐ始まる時間だった。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

「お兄ちゃん早く早く！」
「９ちゃん入ったら危ないよ」
「このくらい大丈夫だよ！　ほら、早くしないと電車が行っちゃうよ？」
「大丈夫だよ、まだ次の便がある」
ショーが終わってからいままで、ずっとお土産屋さんで足止めをくらっていた。とい

うのもショー終わりで客が混雑していて、なかなか会計が終わらなかったのだ。
まあその成果といえば、俺の両手がぬいぐるみさんたちの詰め込まれた袋で塞がれていると言えばいいだろうか。４５と９と４１６、それからＧ１１になぜか自分の分まで買ってしまった。何の飾り気のなかった部屋がにぎやかになりそうである。

「なんとか乗れた～」
Ｇ１１がヘロヘロになりながら座席に座り込む。さすがに俺も疲れが来ている。
乗ってから出発してまでの数分は皆楽しそうに今日の思い出を語っていたが、少しすれば電車の揺れも後押ししてか寝息を立て始めた。二人座席に４５、９、４１６という感じで座り、それぞれの肩によりかかりながら寝てしまっている。
「まったく……電源が切れたみたいに寝るね。……、Ｇ１１ちゃん？」
隣から返事が聞こえないと思っていると、肩に重みを感じた。
どうやら、大きな子供がもうひとりいたようだ。

第十八話　こんなに広かったかな

「おはよう！お兄ちゃん！」

お腹に重みを感じて、目が覚める。見れば９が俺のお腹の上にのっかって満面の笑みを浮かべていた。

「お゛は゛よ゛う゛」

いつもどおりだそうとした声は、ひどいくらいにガラガラ声だった。

「あれ？お兄ちゃん？」

「ああ、ごめんごめん」

９をどかして、近くの棚に手をのばす。すぐにマスクをして、体温計を手にとった。

ピピピッピピピッピピピッ

不思議そうにこっちを見つめる９をなだめながら数分待てば、体温が測り終わる。

「……Ｇ１１ちゃん」

「ん……どうしたのお兄さん」

布団からのっそりと起き上がって、眠たそうに目元をこすっている。
「どうやら風邪をひいたみたいだ。全員退避」
「了解」
少ない言葉数で理解してくれたようで、すぐに9と45を抱えて部屋から出ていった。こういうときはしっかり動いてくれるのがG11のいいところだ。
「あれ、おにいさ――」
扉をあけてきた416が、ずるずると後ろに引きずられていった。今日はさすがに子供とは距離をとらないといけない。
「お兄さん、とりあえず私の部屋に入れてきたよ」
「ああ、ありがとうG11ちゃん」
感謝を告げながら、僕は着替える。
「ちょっとお兄さん！何をしてるの！」
「病院に、いかないとね。伝染病だと困る」
「私もついていくよ」
「いいや、みんなの面倒を頼むよ」
「でも……」
俺は靴をはいて鍵をポケットにしまう。

「大丈夫だよ。そんなに熱も高くないからね」
「わかった。もしなにかあったらすぐに連絡してね」
「うん。じゃあ行ってくるよ」
俺は部屋を出て通路を歩く。
ふと気配を感じて後ろを見れば、3人がぴょこりと部屋から顔を出していた。
「ちょっと病院にいってくるよ。いい子にしていてね」
皆がコクリとうなずくのを見て、満足して俺は病院へと向かった。

＝＊＝＊＝＊＝

「あー、風邪ですねぇ。一応薬をだしておきますので薬剤師の説明をうけておいてください」
やる気のなさそうな医者がメガネをくいくいとさせている。
普通の風邪でよかった。昨日は普通に皆と一緒に寝ていたから、変な病気をうつしてしまっていたら大変だっただろう。
「お大事にー」
すこしぼーっとする意識を振り払いながら、薬局から出る。少し財布には痛手だった

が、はやめに治さなければいけないという謎の使命感が俺をかりたてていた。

「いらっしゃいませ～」

近くのコンビニによって、スポーツドリンクなどをかごにいれていく。

「おっと」

「うわっ」

ふらついた拍子に、ちょうどすれちがった人にぶつかってしまった。

「すみません」

「ごめんごめん、あたいも見てなかったよ」

そう笑う女性は、本当に気にしていなさそうだった。

「大丈夫？すこし顔色が悪いみたいだけど」

「ああすみません。風邪を引いてしまったみたいで」

「そうなんだ。お大事に」

「いえ、ありがとうございます」

随分とフレンドリーな人だ。ひらひらと手をふると、その人は店を出ていった。

「お会計〇〇円になります」

お札を適当に出して、俺も会計を済ませる。熱が上がってきたようで、すこしぼーっ

としていた。

「ありがとうございました～」

外に出れば、重たい湿気が身体にまとわりつく。額にかいた汗を拭いながら、帰路につく。

「ただいま……」

返事はない。当たり前だ。皆は今頃Ｇ１１の部屋のほうにいるはずたった。

いいしれぬ感覚に襲われながらも、俺はかってきたスポーツドリンクを口に含んだ。すこし濃いめの味が舌に残って気持ちがわるかった。

がらがらと扉をスライドさせれば、いつもの布団がおりたたまれ、かわりに一人用の布団がしかれていた。普段はしまっているテーブルが出されていて、その上には水とお粥が置かれていた。お粥はまだ湯気を立たせていたので、ありがたくいただくことにした。

「これは……、４１６ちゃんかな」

もはや慣れてきた味に、ほっとため息をつく。きっとタイミングを見計らって置いていってくれたのだろう。

「おかえり、お兄さん」

「Ｇ１１ちゃん」

「ただの風邪だった？」
「ああ、ごめんね」
「いいよ。ほら、食器回収しに来たんだから早く食べ終わってよ」
「……、そのじーっと見られるとむず痒いんだが」
「いいから」
「ハイ」
　もぐもぐと食べているあいだも、Ｇ１１はずっとこちらを見つめてきていた。
「ごちそうさまでした」
「どうだった？」
「ん？ああ、美味しかったよ」
「……、そう」
　しばらくもじもじとしていたＧ１１は食器を片付けていった。
「ほら、はやく横になって」
「ああ、ごめん」
「ありがとうでいい」
「えっ？」
　Ｇ１１は、次はしっかりとこっちを見て言う。

「ごめんじゃなくてありがとうでいい」
「ああ、ありがとう」
「うん。それにいつもいろいろとしてくれてるのはお兄さんの方だし」
飲み物などを枕元に用意してくれる。
「それじゃあ、くれぐれも勝手に起きたりしないでね」
そういいながらＧ１１が部屋から出ていく。しばらくすれば、隣の部屋の扉がしまった音がした。
こう、一人でこの部屋にいるのが久しぶりで、なぜだかとても広く感じてしまった。

第十九話　無意識って怖い

「完全快復！」

熱もない、喉も鼻も治った。さすがの治癒力だ。といっても、熱を出してから3日ほどかかっているのは内緒である。久々のほぼ一人生活は寂しさこそ感じたものの、免疫力が低い子供にうつすわけにはいかないと我慢した。

「お兄ちゃん！」

部屋の扉がバタンと音をたてて開いたかと思うと、一番のりで9が飛び込んできた。全快しているとはいえ病み上がりに君のタックルを受けると……くる……

「お兄さん。もう大丈夫？」

「ああ、45ちゃん。いい子にしてくれててありがとう」

「うん、お兄さんがすぐに良くなってよかった」

45の頭を優しくなでると、まるですりつけるかのように目を細める。なんだかんだで人肌恋しかったのかもしれない。

「416ちゃんもありがとう。おかゆ美味しかったよ」

「お兄さん、あれ作ったの私じゃない」

「えっ？」
　４１６はやれやれと首を振った。
「あれはＧ１１さんがつくってたの」
　なるほど、食べた時に感想を聞いてきていたのはそういうことか。ようやく違和感がわかった。
「じゃあ後でお礼を言っておかないとね」
「それより早くいこ？」
　９が服を引っ張っていく。今日は近くのショッピングモールに出かける予定だった。
「Ｇ１１ちゃんは？」
「もう少しかかるって」
「そうか……じゃあもう少しゆっくりしていこうか」
　Ｌ―ＮＥでもう少ししてから行くと連絡して、布団を干す。換気をすれば、夏の新しい空気が室内を満たす。
「今日もあついね～」
　９が両手に荷物を抱えながら戻ってくる。あちらの部屋に退避させていたゲーム機やおもちゃだ。
「お兄ちゃん！しゅぎょうしたから一回やろ？」

「はは、こんどは負けちゃうかもなぁ」
差し出されたゲーム機をテレビに繋いであげれば、９は慣れた手付きで設定を終わらせる。
その後、対戦格闘ゲームで勝ってしまって９が再戦をごねるのは、わかりきっていた未来だった。

＝＊＝＊＝＊＝

「あーまた負けた！お兄ちゃん強い！」
「９、こういうときは……」
「そうだね４５姉！」
何をする気だおまっちょっ
「４５ちゃん！」
「だーれだ」
目を小さな手で覆われて、視界がほとんどない。そしてスピーカーから聞こえる体力を削られる音。
「９ちゃん？」

「あ、あと少し……！」
「９……早く……」
　俺は一気に立ち上がる。きっと子供の腕力なら耐えきれずに手を離すだろうとたかをくくっていた。
「ひゃあ！」
「４５姉！」
　その予測は間違っていなかった。たしかに４５は目から手を離した。しかし、見込みがあまかった。
　離された手は反射的に首に巻き付くように強く握られ、立ち上がった身長差で俺は首を後ろの方へと引っ張られる。
　つまりは、しっかりと首が絞まっていた。
「う、ぐぐぐ」
「ああ！負けちゃう！」
「９……も、もう限界……」
　９のキャラの体力を消し飛ばした後、俺はすぐに座って息を吸い込む。
「はぁはぁ……し、しんどかった……」
　そんな俺には脇目も振らず、９はコントローラーをおいて４５の方へとかけよる。

「４５姉……４５姉！」
「９……勝負には勝てたの……？」
「ごめん……負けちゃった……」
しゅんとなっている９の頭を、４５は優しく撫でる。
「いいの……。９が元気ならそれで」
そうつぶやきながら、４５はゆっくりと目を閉じていく。
「４５姉？４５姉ーーーーーー！」
「強く……なるのよ……」

いや、俺は何を見せられているんだ？この学芸会ではトップまちがいなしの二人の子役はいったい？
ぴこんという通知音が俺を現実に戻す。Ｇ１１からのメッセージだった。
「よし、Ｇ１１ちゃんも準備できたみたいだから行こうか」
はーいと元気よく返事をすると、それぞれポーチを持って外に出る。俺も出て鍵を閉

めると、ちょうど隣の部屋の扉も開く。
「あっお兄さん」
「Ｇ１１ちゃん、ジャストタイミングだね」
「うん……」
「ああ待って！」
　大事なことを忘れている。
「鍵、閉め忘れてるよ」
「えっあっほんとだ！あ、あれ鍵ない、おいてきた？あれ？」
　慌ててポケットやトートバッグの中を探るＧ１１だが、どうやら見つからないみたいだ。
「はぁ、まったくもう」
　それを見かねて４１６がするすると部屋の中に入り、すぐに出てくる。
「はい」
「あ、ありがとう」
　恥ずかしそうにＧ１１が笑い、４１６はあきれつつも撫でられる手に頭をすりつけている。
「それにしてもよくすぐに見つけたね」

「べ、べつに部屋の中で見た事がある場所を探しただけ」
「それでもすごいよ」
４１６はじっと見つめたあと、そっとうつむく。そして俺に頭頂部を見せたまま、固まってしまった。
……なぜか変な空気になってきたな。
「お兄ちゃん、多分撫でてほしいんだと思う」
９がコソコソと教えてくれてようやく理解する。
「ああ、ごめんごめん。よし、すごいね」
４１６の頭をなでると、先程のように気持ちよさそうに目を細めた。なんというか、まるで犬か猫の相手をしているようだと思ったのはここだけの話だ。
「それよりお兄さん、バスの時間が」
「ん……？」
腕時計を見ると、ギリギリの時間になっていた。
「ほら！急いでお兄ちゃん！」
９が走って先行し、４５と４１６もそれに続いて走っていく。
「ああ！転ばないようにね！」
「うん！」

元気よく返事をして、３人ともバス停へと走っていった。
「よし、行こうかＧ１１ちゃん」
「え！ああうん」
Ｇ１１は、ほぼ無意識に差し出した俺の手を優しく握り返してきた。

第二十話　特別編　別に惚れたってわけじゃないんだからね

「おい！ちょうどよかった！」

昼食を終え、食堂から次の講義に向かおうとした時だった。サークルでいつもよくしてくれている先輩の声に俺は振り返る。

「おまえ、今日暇か？」

「暇って……、まあサークルの後はなにもないですけど」

「よし、これでラスト一人確保だ。おーい！見つかったぞ！」

先輩は吹き抜けから上の階へと叫ぶ。すると先輩の同級生たちがひょっこりと顔を出した。

「おいおい、大丈夫かよそいつ」

「あれじゃ、イチオシの後輩とかいってた奴じゃろ」

「いいんじゃねえの？どうせ数合わせだ」

口々にそんなことを言われる。

「あの、先輩。いったいなにが」

「バーカ、決まってるだろ？合コンだ。一人足りなくてな～困ってたんだよ」
「困ってって。一人くらいいいんじゃないですか」
「今回ばっかしはそうも行かねえんだよ！」
　そう言いながら先輩は写真を見せてくる。
「ＷＡちゃん、お前らの学年の高嶺の花！あっちが連れてくるらしいんだ。なのにこっちの人数揃わなかったらカッコつかねえだろ？」
「は、はぁ……」
「まあそういうことだから頼んだぜ！」
「は、はい……」
　今晩の地獄の晩ご飯が決定した瞬間だった。

＝＊＝＊＝＊＝

　その日は講義が始まってもあまり落ち着かなかった。いや、落ち着かないのも仕方がないだろう。何故だか今日に限って、俺の前に例のあの子が座っているからだった。
　ＷＡ。物静かで美人で、まさしく高嶺の花を体現してるような子だ。普段から大人びた振る舞いでいるためか、言ってしまえば話しかけづらい。もちろん女友達はいるらし

いが、話の中心に登ることは少ないのかいつも輪の隅の方で静かにしている。
「じゃあテストの模範解答だ。点数が高い生徒の答案を貸してもらった」
教授がスクリーンに映し出した解答は、名前こそ隠されているものの、きっと今日も彼女のものだろう。成績もズバ抜けてよく、こういった成績に絡むことなら基本的に彼女が一番上にいた。
「まさしく模範ってところだな。むしろ分かり易すぎるくるいだ。皆もこのくらい勉強するように。それでは今日は以上だ」
まあここまで書き連ねてなにが言いたいのかというと……

この大学に彼女と釣り合う男は存在しない。

ナンパや呑みの誘いで玉砕したという男は数知れず、女同士ですらあまり行かないという話もある。
講義が終わってボサボサと片付けていると、ＷＡさんが立ち上がる。ワインレッドの眼鏡を外してケースにしまうと、突然その場にしゃがみこんだ。
「これ、落としてますよ」
「ん？ああ、ありがとうございます」

そう言って俺に何かを手渡すと、教室を出て行ってしまった。
俺はしばらくその後ろ姿を見つめた後に、受け取ったものを見る。それは小さくなった消しゴムだった。残念ながら俺のものじゃあない。きっと近くに落ちたていたから俺のだと勘違いしたのだろう。
まあ縁起はよさそうだと、俺はポケットにそれを突っ込んでから荷物を片付けた。

＝＊＝＊＝＊＝

サークルの終わりに、先輩が一方的に肩を組んでくる。
「逃げなかったな」
「逃げるわけないじゃないっすか」
「いやー、ＷＡちゃんがくるってことだしビビるかなってな！」
「ビビリはしませんけど……、あっちはどういう集まりなんですか」
「仲良しグループってだけ聞いてんな」
「じゃあＷＡさんのいるあのグループですかね」
講義でよくいる中心タイプのグループだ。とくにリーダーの子はよく彼氏を取っ替え引っ替えしていると聞くし、きっと先輩たちに目当てがいて組んだんだろう。対価に

ＷＡさんを呼んでまで。
「どうだ。お前から見て可愛い子はいるか？」
「まあ皆可愛いと思いますよ」
「はぁ……それだからおまえは」
「……？どういうことですか？」
「つまりはだな、目当ての子はいるのかってことだ」
「いえ、とくに」
今日は本当に付き合いできただけだ。そりゃ彼女の一人でもできれば大学生活は変わるだろうけれど、今日のメンツでは一歩引かざるをえない。
先輩たちはまあ言ってしまえばモテる。おそらくあっちのグループは俺に目なんて向けないだろう。
「お前そこはＷＡちゃん持って帰りますくらいなぁ」
「ははは、自分には無理ですよ」
「わかんねえぞ？ああいうタイプは実は前から～とか言い出すんだ」
「やけに押してきますね」
「まあおまえにとられるのはシャクだから俺も狙っていくけどな」
そういう先輩は、まあ言ってることはアレだが見てくれはいい。これはワンチャン

あったりするのだろうか。

などと考えていたら、店についてしまった。もうすでに他のメンバーは中にいるらしく、個室へと案内される。

「いやー遅れてすまんね、片付けに時間かかったわ～」

「おいおっせ～ぞ～」

先輩が軽い口調で部屋に入っていくのに続く。やはり女性陣のメンバーは想像どおりだった。

「じゃあ適当に席替えするか～」

のりの軽い男がそう言って、女子側の提案によって誕生日順ということになった。

どうやら偶然というのはあるらしい。夏という早い時期にも関わらず、俺が一番はやい誕生日だった。そして対面――つまりは俺の次に誕生日がはやい人は、ＷＡさんだった。

「あ、ども」

ＷＡさんは無言でコクリと頷いた。今日の講義で見た時と服が変わっている。どう

やら少し気合が入っているようにも見えた。
「それじゃあ飲もうか！すみませ～ん」
先輩が店員を呼んで皆アルコールを頼んでいく。俺はとりあえず先輩たちに合わせて生ビールを、女子側は適当に軽いサワー系を頼んでいた。
「私ホワイトサワーで！ＷＡちゃんは？」
「わ、私も同じものを」
グループの中心核の女子に聞かれて、ＷＡさんは慌ててそう答えていた。アルコールに弱いなら隠すこともないだろうに……。なんだかこうかわいそうに思えてきた。きっとある程度無理に誘われたに違いない。
「じゃあかんぱ～い！」
グラスを鳴らす。とりあえずグラスの生ビールをグッと飲み込んだ。独特の苦味が、舌をしびれさせる。
ＷＡさんもちびちびとグラスの中身を消費していっていた。

料理が来るとともに、皆の談笑の声も一層大きくなる。アルコールありの飲み放題のため、次々にアルコールが運ばれてくる。はじっこの席にいる俺は、無駄にたくさん頼まれたアルコールが流れてくるものだから、ついついのみすぎてしまっていた。

「う、うう……」
「ＷＡさん？」
「い、いや、大丈夫。まだ酔ってない」
「そ、そう……」
　少し頬を赤らめてはいるけれど、まだ意識はしっかりあるようだった。
「よーし、席替えってことでいっこ隣にずれよ～！」
　いつのまにか流れでそんな話になったようだった。反時計周りにズレるとなると、俺は対面の席へと移動しなきゃならなかった。そしてつまりはだ、つまりはさっきそこにいたＷＡさんの隣に座るということになるというわけで……
「あの……大丈夫……？」
「うー？ぜんぜん酔ってない、酔ってないんだかりゃ」
　あきらかにフラフラし始めたＷＡさんと、何度か身体がぶつかる。香ってくるほどよい香水の匂いが、アルコールで鈍った鼻にもよく効く。
「ほら、水のんで」
「だいじょうぶだもん」
　いつものクールさはそこにはない。もはやだだをこねる猫のようだった。
「ＷＡちゃん大丈夫？」

「ほらお茶お茶」
周りもＷＡさんの異変に気がついたのか、視線があつまりつつあった。
「だ、だいじょうぶっていってるでしょ！」
そういって目の前のグラスを一気に飲み込んだ。目の前におかれていた、俺ののみかけの、赤ワインを。
「あの……ＷＡさん？」
グラスを傾けた姿勢で固まっている。
「ヒック」
固まった場に、一人のしゃっくりが響く。言わずもがなＷＡさんのである。
「帰る」
突然、ＷＡさんは立ち上がる。しかしアルコールが想像以上にまわっているのか、ふらりと身体が揺れる。
「あぶない」
つい反射的に身体が動いて、ＷＡさんをささえる。ＷＡさんは俺の腕を支え代わりにして、そのまま外に向かおうとしている。
「ううん……帰る……帰るんだから……」
「まったく……おい、送ってってやれ」

「俺がですか？」

先輩はため息をつきながらそんなことを言う。まあ、たしかに腕を掴んできているこの手は、なかなか離してくれそうにもない。

「でもＷＡさんの家知らないですし」

「近いし……自分で帰る……」

そうはいいながらも、掴む力が緩むことはない。顔はムスっとしていているものの、腕に顔を擦り付けて離してくれない。どこかで見たことがあると思ったが、出かける主人を離さない猫にそっくりだ。

「ああもう……、じゃあお先に失礼しますね！」

二人分以上のお金を適当に先輩に握らせて、ぐいぐいと引っ張るＷＡさんに促されるがままに店を出る。夜風にあたると身体が急に冷えて、アルコールでぼうとしていた頭がはっきりしていく。

そして冷静になるにつれて、今の現状を再認識し始める。お持ち帰り……という判定に入るのか？いや、というか何だこの香る匂いは。香水だけじゃない。なんだか別のなにかを感じる。

「ん……こっち……」

引っ張られるようにして住宅街の方へと導かれる。

「ここ」
「は、はぁ。ここかぁ」
　そこには想像以上に大きいマンションがあった。エントランスに入ると、受付の男性が深々と頭を下げる。
「ＷＡ様、お帰りなさいませ」
「うん……ただいま」
　少し照れくささを隠すように、ＷＡさんは俺の後ろに隠れてグイグイとエレベーターホールへと押してくる。
「ああ、お連れ様」
「ん？俺ですか？」
「なにかご入用の際はフロントまでお電話ください」
「……、ここってホテルでしたっけ」
「いえ、これは個人的なサービスですので」
「ど、どうも……」
　よくわからないがお金がかかっていることはわかる。育ちの良さは節々から感じていたけれども、どうやら想像以上の金持ちのようだった。
「ＷＡさん、何階？」

「２階」
２階なのにエレベーターをつかうのかという言葉をグッと抑えて、ボタンを押す。エレベーターが上昇を始め、すぐに停止する。
「こっち」
すこし酔いがさめてきたのか、ＷＡさんは自分でしっかりと歩くようになってきた。しかし俺の袖をクイクイと引っ張るのでしょうがなく着いていく。
「少し散らかってるけど……入って……」
「いやいや、俺はもう帰らせてもらうよ」
「いいから……」
袖を引っ張る力が強くなってきたので仕方なく部屋にお邪魔する。綺麗に片付けられた、シンプルな部屋だった。
靴を脱ぎ捨てたＷＡさんは今度はしっかり腕を握って引っ張ってくる。俺も靴を脱いで、引っ張られるがままに奥の方へと進んでいく。
後ろでカチャリと、自動で錠がかかる音がした。
「うう……」
「ＷＡさん？」
「眠い……、おやすみ……」

そういって、ベッドに身を投げ出す。そう、俺の腕を掴んだまま。
「あの……」
声をかけた頃には、もうＷＡさんは寝息を立て始めていた。寝ているだろうに、俺の腕を離さないどころか、手に頬を擦り付けてくる。
「猫だ」
俺はそうつぶやいて、ベッドに座り込む。芳香剤の香りが、だんだんと頭をリラックスさせていくのを感じ取っていた。
アルコールも十分にまわっている俺が、睡魔に勝てるわけもなかった。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

パチリと目を開ける。知らない天井だ。
右手に柔らかく温かい感触を感じて、そちらを見る。
目を細めてすりすりと頬に俺の右手を擦り付けている誰かさんと目があう。
「あの……えっと……おはよう？」
「なっなっ……！」
どうやら彼女も寝ぼけていたらしい。目を見開いて、顔が急速に真っ赤にそまってい

く。
「なんでここにいるのよ！」
「そりゃＷＡさんに引っ張られたからですが」
「あっえっ……たしかに昨日……てことはどこまで夢……？」
「へっ？」
「ああでももう今さらよねもう後にも引けないし」
「あの……ＷＡさん？」
「ふふ、ふふふ」
なんだかぐるぐる目で迫ってくるＷＡさんは、なんだかこう恐怖を感じた。
「そ、それじゃあ俺はここらで失礼！」
急いでベッドから飛び起きて、バタバタと玄関へと向かい、靴のかかとを踏んで扉に手をかける。
ガチャガチャ
ところがどういうことか、鍵が開かない。
「私にあんだけのことをさせたんだから……責任とりなさいよね」
「いや、何も、何もしてない気が」
「うるさい！いいから私の言う通りに彼氏になりなさいよ！」

頭の中をハテナが埋め尽くす。
「いや言う通りにってそんなことは何も」
「えっ……えっ？」
真っ赤な顔がさーっと青くなっていく。赤くなったり青くなったり忙しい顔色である。
「ちょっとまってください。そういえば夢だとかなんだとか言ってましたよね？いったい夢の中で俺が何したっていうんですか」
「えっそれはその……」
こんどは恥ずかしそうに顔を赤らめる。
「ま、とりあえず俺は帰りますね」
そういってまたドアノブに手を掛けるが、鍵は解除されない。
「鍵は開かないわ」
「な、なんで？」
「私が遠隔でロックしてるから」
ＷＡさんの方を見れば、右手に握り込んでいるものがある。
「あの、帰りたいんだけど？」
「私の彼氏になるなら開けてあげる」

「え？ええ……」
「ねえ、どうするの？」
「一応聞いときたいんだけどさ」
「うん」
「彼氏にはならないっていったらどうなるの？」
「彼氏になってくれるまで帰さない」
だめだ、話が通じる気がしない。
いや、でも考えてみれば、大学1の美女からの告白を受けているんだ。これは喜ぶべきことなのか？と、とりあえずここは……
「わかった！彼氏になるよ。俺でいいなら」
「本当に？よかった」
うしろでガチャリと音がする。本当に鍵を解除したようだ。
「が、学校では内緒にしてよね！」
「ああ、わかったよ」
もうわけがわからない。とりあえずはやく自宅に帰りたかった俺は、てきとうに返事をしてその場を逃げるように去った。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

滑り込むように講義室に入った俺は、その数分後には頭を抱えていた。
たしかにＷＡさんはいつもどおり、そしてこれまで通りだった。しかし周りがそうではない。明らかに情報が漏れている。明らかにこちらを見ながらコソコソと言われるのは気分が良いものではない。
講義が終わってから逃げるように講義室を出ると、たまたま先輩にすれ違う。
「おっ！」
「先輩、こんにちは」
「おまえ、やったなぁ！」
そういいながらボンボンと背中を叩いてくる。
「あの、先輩。何がですか？」
「何ってそりゃぁ……ＷＡちゃんと付き合うことになったんだろ？」
「あの、それどこから聞いた情報ですか？身に覚えが」
「なに、とぼけんなよ。本人から聞いたぞ」
「はっ……えっ？」
「そもそもあの合コンだってそもそも……おっと」

「先輩？」
「なんだ、めずらしく満面の笑みなんか浮かべて」
「ちょーっとお話聞かせてくださいねぇ」
「やだなー。じゃあ次の講義に行くかー」
「先輩、昔の彼女さんに連絡しましょうか？」
「ハイナンデモハナシマス」

　つまりは、昨日の合コンはＷＡさんと俺とをくっつけるために企画されたものであり、主催は女性陣グループのリーダー、隠れた恋心を後押しするために俺にけしかけたと。
「まあ……そういうことかと思いましたよ」
「……、別れるのか？」
「……、どうしましょうか」
　すぐに別れたいというほど嫌いというわけでもない。そもそも、いままで学校での表面上のＷＡさんしか見ていなかった。きっと彼女は、もっとよく話して、感情的で、そしてクールと言うよりかはかわいい方な気もする。
「ならしばらく付き合ってみろよ。そこから考えるんだ」

「彼女を何人も乗り換える先輩の言う言葉はためになりますね」
「うっ、おまえってそんなに毒舌だったっけか」
まあすこし強めにでもあたらないとわりにあわない。

突然、スマホが震える。見れば、WAさんからのメッセージだった。
「連絡先教えたのは俺じゃないからな！じゃあな～！」
そういって先輩は逃げていってしまった。
ため息をつきながらアプリを開くと、つまりは昼食のお誘いだった。
「別に来なくてもいいって……、しかたない。いくか」

これは突然俺にできた、素直じゃないのにベタベタに甘えてくる彼女のお話。

＝＊＝＊＝＊＝

「ねえ、暇ならお茶しない？」

「そんな時間とらせないからさぁ」
　ああ、面倒だ。このような容姿だからか、よくこういうのに絡まれる。今回のはひときわ面倒なタイプの人種だった。冷たくあしらおうにも、離れてくれそうにない。
「ごめん！そこの人たち避けて！」
　突然、ナンパ男たちとの間に自転車が急ブレーキをかけながら割り込んでくる。
「あっぶね！いやーすみませんすみません」
「てめぇ！」
「あぶねえだろ！」
「いや、ほんと、怪我なくてよかったっす！すみませんすみません！」
　ペコペコと頭を下げる自転車の持ち主に、ナンパ男たちは唾を吐き捨てながらどこかへ言ってしまった。
「君も怪我がないみたいでよかった」
　そういって手をさしのべた彼は、どこかで見覚えのある顔だった。たしか同じ大学の……、それ以上の情報は持ち合わせていない。
　その大きな手を借りて立ち上がると、私は汚れた服の土を払う。
「あぶないじゃない、少しは前を見て運転することね」
　そんなふうに強い言葉をかけても、彼は申し訳無さそうに頭を下げるだけだった。

「本当にごめん。っと急いでるからじゃあね！」

そういって自転車にまたがると、すぐに全力でどこかへと向かっていった。

それが、私が彼を認識した最初の日だった。

その日、講義室の真ん中の方で「講義の時間一時間間違えて早く来ちゃったわ」なんて友達と談笑する彼を、無意識に目で追っている自分がいた。

第２１話　こりゃ長引きそうだ

ショッピングモールは、今日もやたらと人が集まっていた。夏休みのためか、特に子連れの客が多い。

そして、そんな子連れの客の一組が、俺たちである。

「お兄ちゃん！あっちの店いこ！」

「お兄さん、あそこのパンケーキ……」

「今日の晩ごはんの食材……」

「わかったわかった！順番に回ろう？」

いつもどおり９と４５に手をひかれて、服の裾を４１６に掴まれている。

「……、Ｇ１１ちゃん？」

そういえば先程からＧ１１の声を聞いていない気がする。きょろきょろとあたりを見回せば、ベンチに座り込んでいた。

「Ｇ１１ちゃんはどこか行きたい店はある？」

「……」

しかしＧ１１は何も答えない。不思議に思っていると、９が走っていってうつむいて

いる顔を覗き込んだ。
「お兄ちゃんダメみたい、完全に寝てる」
「Ｇ１１ちゃん！起きてくれ！ここで寝ないで!?」
「ふぇっ？あっおはよう」
「おはようって……まったく、ほら行くよ」
「うん……ごめん」
　差し出した右手を、Ｇ１１は控えめに握り返してくる。
「あー、お姉ちゃん私の場所～！」
「あっ９ちゃんごめんねすぐにどくから」
「えへへ、いいよ。そのかわりお姉ちゃんの右手は私のね！」
　そう言って９はＧ１１の右手を掴む。つまりは４列横隊になったということだ。
「いや、横に幅を取りすぎだよ」
　つないでいた手を離して、Ｇ１１の後ろにつく。しばらく俺とつないでいた左手を握ったり開いたりを繰り返した後、すこしムスっとした顔でこっちに振り向く。
「お兄さん、私も買いたいものがあるの」
「Ｇ１１ちゃん？」
「来てくれるよね？」

「……、ハイ」
　なんとなく無言の圧力を感じて、そう答えてしまった。でもまだおやつの時間には時間があるし、食材の買い出しも荷物になるから最後でいいだろう。
「それでＧ１１ちゃん、買いたいものって？」
「あれ」
　そういって指差した方向をたどる。
「あれって……あのバッグの店かい？」
「ううん、その隣」
「文房具屋か～」
「逆」
「……、まじで？」

＝＊＝＊＝＊＝

「お兄ちゃんこれどう？」
「ああうん、似合ってるよ」
「お兄さん……私にはどれがいいかな……」

「４５ちゃんはそうだね、これとかどうかな」
「お兄さん、私これに決めた」
「４１６ちゃん?もう少し待ってね」
　気まずい。すごく気まずい。いつもどおり子供に囲まれているのはもう慣れたことなのだけれども、今の状況はすごくよろしくない。
　横を通り過ぎていった女子高生が、チラチラとこっちをみながらコソコソと話をしている。まあそうだろう。そんな子供を持つような年齢にも見えない男が、女児用の水着売り場にいるのだ。まだ子どもたちがしょっちゅう話しかけてくれるから助かっているけれど、もはや通報ものではと思い始めてる自分がいる。
「あのお兄さん」
「ああ良かったＧ１１ちゃん!」
　この場を預けて退散しようと声の方向へ振り返る。
　振り返った俺は、そのままフリーズした。
「あーえっと……に、似合う?」
　服の上から、少し大胆な水着をあわせたＧ１１がそこには立っていた。さすがに恥ずかしいのか、頬を赤らめている。
「あの……お兄さん?」

「はっ！ごめんごめん、似合ってると思うよ」
「じゃ、じゃあこれにする……」
　そのままレジに直行するＧ１１を見送りつつも、子供たちの水着をかごにいれる。なんとか間に合った。
「ああ、これもお願いします」
　Ｇ１１がお金を出すまえにかごを差し出して、会計をもつ。
「そんな、私の分は私が払うのに」
「これも必要経費でしょ。感謝は俺じゃなくて叔母さんや４１６ちゃんのお父さんにね」
　支払いを済ませて、袋詰めを待っている間に残金を確認する。さすがに足りなくなってきた。別行動をしてお金を引き出しにいったほうがいいかもしれない。
「お兄ちゃん！私が持つ！」
「そうかい？じゃあお願い」
　元気に立候補する９に袋を任せて、まだ申し訳無さそうにしているＧ１１に多めにお金を渡す。
「まだいろいろ入用だと思うから先に買い物しててくれるかい？」
「えっ……？お兄さんは？」

「ちょっとお金をおろしてくるだけだよ」
「わ、わかった。任せて……」
なんだか不安だ。そう思って４１６の方を見ると、やれやれと首を振りながら４５と９の手を握った。
「４１６ちゃんも、任せたよ」
「お兄さん、早くもどってきてね」
「うん、すぐにね」
そう言って皆が別の店に向かうのを見送る。確かここの一階にＡＴＭコーナーがあったはずである。階段を下ってしばらく歩く。
「げっ、まじか……」
今日に限って、人だかりができている。そういえばと今日が休日であることを思い出す。子連れからご老人まで、多種多様な人がＡＴＭに列をなしていた。
「さすがに時間がかかりそうだ……」
俺はＧ１１に連絡をとってから、その列に並ぶ。しかし全然進まない。長引きそうだとスマホを眺めていると、天気予報が流れてくる。
「しばらくは晴れか……。いい川遊び日和になりそうだ」
熱中症対策もしっかりしていかないといけないだろう。俺は買い物リストに、いくつ

か対策用品を加えてからスマホを閉じた。

第２２話　我慢も身体に毒

「Ｇ１ちゃん、今どこだい？」
　ようやくお金を下ろしてから、電話をしてみる。どうやら水着売り場の近くにまだいるようだった。
「わかった、もう少ししたら向かうからそこにいてくれる？」
　返事を得てから、ため息をつく。

　今、俺のズボンは小人に掴まれていた。

「あの……、どうしたんだい？」
「お兄ちゃんだれ？」
　こっちが聞きたい。この少女、突然掴んできて離そうとしない。もちろん無理やり振り払うこともできるだろうが、それで泣かれたらどうしようもない。
「お母さんかお父さんは？」
「いな～い」

デリケートな問題が発生した。なんでこんな地雷級の幼女から捕まってしまったんだ俺は。

頭の中では、子供たち３人に振り回せるＧ１１の幻影が助けを求めてきていた。

「よし、じゃあここに詳しいお姉さんがいるところにいこっか」

「ヤダ」

うーーーーん?どうしろというのだろうか。迷子センターに押し付けようにも、この幼女はその場から動こうとしない。

「お兄ちゃん困ってるの?」

そうだね君で困ってるよ。なんて言えない。

「私が助けになってあげる!」

それはありがたい。じゃあぜひ迷子センターに行ってもらいたい。

残念ながら今日は混雑してる。俺に暇があればこの子の保護者をみつけてもいいんだけども、難航しそうだ。

それに、皆を待たせている。残念ながら暇もない。

「お兄ちゃんはさ、好きな人いる?」

「どうしたの唐突だね」

「いいから答えて!」

好きな人……、好きというのがよくわからないけれど、いわゆる恋人候補ってことなのだろうか。

「いないならウチのおねえのお嫁さんにしてあげる！」

「うん、言うならばお婿さんだね。僕は男だよ」

「そんなこといいから！」

「いないと思うよ」

「よかった！早くおねえに会わせないと！」

大変な家庭なんだろうなぁ。父も母もおらず、こんな小さい妹と姉だけ。懐に入ってるお金が自分のものだったら思わず渡してたくらいだ。

「おねえ！」

「もー！どこ行ってたの！」

幼女が大声でそう呼ぶと、通路の奥からズンズンと速歩きで誰かが迫ってくる。

「おねえ！見つけた！」

「なにを？」

「お嫁さん！」

口を開けて固まったまま、その女性は俺の方に視線を向ける。いや、そんな目で見ないでくれ。

「あれ、どこかで会ったことあるっけ？」
「ん？」
　女性がじーっと見てくるもんだから、思わず視線をズラした。
「わかんないや。それで、あたいの可愛い妹に何の用？」
「それはこっちのセリフなんですがね。まあお姉さんが見つかったみたいで良かったです」
「そうみたい……だね。迷惑かけてごめんね？」
「いえ、元気でいいじゃないですか」
「変なこと口走ったりしなかった？」
「うん……まあ大丈夫でした」
「ねえねえおねえ」
「もう、お嫁さんなんていうから驚いたじゃん」
「だって」
「だってもあさってもありません」
「むーっ！」
「ほら、行くよ！」
　ごめんねとペコペコしながら、女性は幼女を引きずっていった。まるで嵐のような姉

妹だった。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

「あ、お兄さん」
「Ｇ１１ちゃん、ごめん待たせたかな」
「うんにゃ、みんなまだ遊んでるし」
子供たちは皆、おもちゃ売り場のぬいぐるみコーナーにかじりついていた。なんというか安定してわかりやすくて助かる。
「よし、そろそろ１５時か」
そう言ってみると、おそろしい勢いで３人ともこちらに振り向く。特に４５なんかは、溢れんばかりの期待に満ちた目をしている。
「入り口付近にあったパンケーキ、食べにいく？」
返事はここで語るまでもないだろう。

数分後、頼んだパンケーキの大きさにあたふたしながらも夢中で頬張る子供３人プラスαをながめつつ、俺はコーヒーを啜るのだった。

「お兄さんはパンケーキよかったの？」
「ああ、まあ気になりはしたけど……」
　最初こそは勢いよく食べていた３人だったが、先程からあまり進んでいない。やはり子供からしたらここのパンケーキは大きかったようだった。
「なるほどね」
「Ｇ１１ちゃんは良かったの？」
　Ｇ１１ならきっと食べるだろうと思っていたんだが。甘いものも好きなほうだったはずだし。
「わ、私は今日はいいよ」
　そういいながらも、Ｇ１１はチラリと水着のはいった袋を見た。なるほど、まあ女の子だし気にするのも仕方ないか。
「お兄ちゃん……」
「ん？９ちゃんどうした？」
「ごめん。お腹いっぱい……」
「ああ、いいよ。残りは俺がもらおうかな」
「ありがとう！」
　９から皿を受け取ると、４５と４１６も恥ずかしそうにこちらを見る。

「二人もかい？」
「うん……」
「ごめんなさい」
「次からは食べる量を考えて注文するんだよ？」
　コクリと頷いたのを見て、二人からも皿をもらう。
「しっかし、３皿かー。少し多いかなぁ」
　少しわざとらしく隣を見れば、じっと皿の上のパンケーキを見ているＧ１１がいる。
「Ｇ１１ちゃん」
「あっうん何？」
「俺だけじゃ少し多いから手伝ってくれないか？」
「えっ」
「俺も食べ過ぎると晩ごはんが入らなくなるからさ、頼むよ」
「うん、しょうがいないなぁ～」
　そういいながらも、Ｇ１１は満面の笑みでパンケーキを頬張るのであった。

第２３話　やわらか低反発枕

バスが去っていき、俺ら４人だけがその場に取り残される。別に置いていかれたというわけではない。ここが今日の目的地だ。

「すっごい音！滝があるんだっけ」

「待って、まずは着替えて」

「いいから４１６ちゃんも早く！」

９に引っ張られるように４１６が連れて行かれる。置いていかれないように俺たちも滝へと向かうことにした。

滝は思っていた以上に大きく立派だった。見上げるほどの高さから水が落下して、水しぶきが遠くまで飛んできて涼しい。

「お兄さん？」

「４５ちゃん？９ちゃん達と一緒に行かなくていいのかい？」

「お兄さんお昼の準備するよね？手伝う」

助かる……んだがせっかく遊びに来たんだ。

「まずは遊んでからだ」

＝＊＝＊＝＊＝

「うわぁ、お兄さんびっしょびしょじゃん」
「あはは、まあね」
まさか３人からジェットストリームアタックを仕掛けられるとは思わなんだ。おかげで濡れる予定のなかった上半身や髪までびっしょりだ。
「とりあえず椅子だけは出しといたよ。はいタオル」
「ありがとうＧ１１ちゃん」
タオルで頭を拭いていると、ドンと下半身にぶつかられる。
「９ちゃん？」
「お腹すいた！」
「そうだね、じゃあお昼の準備しようか」
お昼と聞くやいなや、体が冷えないようにタオルを羽織っていた４１６が動き出す。彼女が到着までずっと大事そうに抱えていたバスケット、その中には今日のお昼ごはんがたくさんつめこまれている。
「今日も４１６ちゃんが？」

９がそう尋ねると４１６は首を横に振る。
そう、今日は珍しく俺も手伝った。といっても簡単な部分だけで調理自体はほとんど任せっきりだったけども。
「お兄ちゃんが!?」
「まあ少しだけね。この量はさすがに手伝わないといけなかったよ」
張り切って用意しすぎた気もするけれど、皆育ちざかりだし、残しても今日の晩ごはんに回るだけだ。
それに……
「うわあ！たくさんだ！」
「何から食べようかな！」
４５と９がキラキラとした目でバスケットの中を覗き込んでいる。量は正義だ。この笑顔が証明だろう。
「さあ、たべようか」
「うん！いただきます！」
「いただきます」
皆があまりにいい食べっぷりをするからついつい笑顔が伝染る。
「はいお兄さん、お茶」

「ありがとう。Ｇ１１ちゃんもほら、食べなよ」
「うん、いただきます」
ちょびちょびとおかずをとって、食べている。おにぎりには手をつけずか。
「Ｇ１１さん」
「ん、なにかな４１６ちゃん」
「おにぎりも食べてください」
そういって４１６がおにぎりをさしだす。さすがに申し訳ないとおもったようで、恐る恐るといった風におにぎりを頬張る。
すこし具材多めのかしわ飯のおにぎりだ。俺を除いて全員女の子ということで、食べやすいようにサイズは小さめである。
「うん、おいしい」
Ｇ１１ちゃんは頬張りながら笑顔になる。どうやら口にあったようだ。
どうして俺がおにぎりに詳しいのかって？そりゃ俺の数少ない『手伝い』の一つがおにぎりを握ることだったからだ。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

食事を終えて少しまた遊び、荷物の方へと戻る。
「お兄さん交代してこよっか？」
「いい？じゃあ頼むよ」
Ｇ１１に皆のことを任せて、シートの上に寝転がる。木漏れ日が気持ちよくて、すぐに寝てしまいそうだった。
クーラーボックスから缶ジュースをとりだすと、なにやらじーっと見つめてくる視線を感じる。
「……、いるかい？」
「ありがと！」
謎の少女に缶ジュースを渡すと、トテトテと走り去っていった。首をかしげながらもう一本だして、プルタブを引く。炭酸飲料特有の音を楽しみながら、クーラーボックスを椅子にして中身を飲み込む。
「随分と美味しそうに飲むんですね」
「４１６ちゃんも飲んでみる？」
いつの間にか戻ってきていた４１６にクーラーボックスから同じものをとりだしてあげる。
「んん……炭酸は苦手」

「そうか」
　残念だ。真夏の炭酸教に新たな信者かと思ったがだめだったみたいだ。
「遊び疲れたのかい？」
「少し……」
　４１６はころんとレジャーシートの上に寝転がる。よく食べてよく遊んだからだろうか。寝息を立て始めるのは明らかだった。
「あれ？４１６ちゃん寝ちゃったの？」
「ん？ああ」
　少し経つと、Ｇ１１が４５と９を連れて戻ってくる。
「は～いっぱい遊んだ！」
「つ、つかれた」
　４５と９もレジャーシートの上に寝転がって、しばらくすると寝息をたてはじめる。二人とも、限界だったみたいだ。
「Ｇ１１ちゃんは大丈夫？」
「そんな子供じゃない。でも少し疲れたかな」
　３人とも仲良く固まって遊んでくれるとはいえ、面倒みるのは短時間でも大変なもんだ。

「お兄さんも疲れてるでしょ？寝てもいいんだよ？」
「……１０分くらい寝ても？」
「うん、いいよ」
なんだかんだで俺も疲れがたまってるみたいだ。寝転がって目をつむると、眠気が急激に襲ってくる。
なにやら頭の後ろに柔らかい感覚を覚えたが、それが何であるのか確かめる前に俺の意識は夢の世界へと旅立っていってしまった。

第２４話　転ばぬ先の

なんだか懐かしい夢を見ていた気がする。
たしかこれはまだ俺が小学生だった頃だ。
家族で、川に遊びにいった日だ。家族ともアウトドアな方ではなかったから、よく覚えている。
その日は数日前に雨が降った後で、まだ子供だった俺には急で危ない流れになってる箇所もあったんだったっけ。
その日、岩場に足をぶつけた拍子に転んだ俺は流れに身をのまれて……

「お兄さん？」
「……」
夢はそこまでだった。変な汗をかいており、心臓がバクバクと鳴っている。見下ろしてくるＧ１１ちゃんの顔を見て、ただ居眠りをしていただけだと認識する。

「大丈夫……？」
「ん、ああ大丈夫だよ」
　起き上がって伸びをすると、川の周りの冷えた空気で頭が冴えてくる。上から見下された？そういえば先程まで後頭部に柔らかいものがあった気がする。枕なんて持ってきていない。ということは……
「ごめん」
「えっ？」
「重かっただろう？」
　頭でっかちとはよく言われたもんだ。レジャーシート一枚の上で膝枕だなんて、足がしびれただろう。
「……そうじゃないと思うんだけど」
「ん？何かいったかい？」
　あまりにボソリと呟くもんだから水の音にかき消されて聞こえなかった。
「ああ、そういえば」
　言うべきだろうし、言うなら今だろう。
「水着、似合ってるね」
「えっ……」

少し緑がかった水色の水着が、上から羽織っているパーカーからのぞいていた。髪色も相まってとてもよく似合っていると思う。
「その……ありがと」
少し照れくさいな。川に飛び込んでこようか。
などと考えていると、側で寝ていた子供たちが起き始める。
「お兄ちゃん？おはよう」
「おはよう。よく眠れた？」
「うん！また川で遊んできていい？」
９は元気にそう言っているが、４５と４１６はまだ眠そうだ。
「Ｇ１１ちゃん、少し遊んでくるね」
「い、いってらっしゃい」
頬を赤くしたままのＧ１１に二人を任せて、９に手を引かれるままに川のほうへと歩いていく。日はてっぺんを過ぎてはいてもまだ高く、川にキラキラと反射された光が眩しかった。
「ねえ！見てみて！」
９が川に入って、その小さな手で水をすくう。中には、逃げ切れなかった小魚がぐるぐると回っていた。

「へへっ、すごいでしょ！」
「すごいね」
　俺も試しに狙ってみるが、小魚はすいすいと手のひらから逃げていく。
「何かコツがあるのかい？」
「こう待って、来たらザバーってやるんだよ！」
「ザバー、ねぇ」
　何度か挑戦するが、なかなか上手くいかない。手が大きい分、俺のほうが有利なはずなんだがなぁ。
「よく見てて！」
　９は水面とじっとにらめっこをし始める。そして手を音もなくスッと入れ、そしてザバーと一気にすくい上げた。
「ほら！二匹だよ！」
「すごいな！俺も……」
　さらに集中する。９のようににらめっこをして、小魚の動きを追いかける。
「違うよお兄ちゃん」
　手を入れようとして俺を、９が止める。
「追いかけちゃだめだよ。逃げちゃうから」

「違うのかい？」
「あっちが油断して近づいてきたところをだよ！」
「なるほどな」
　ちょうど、小魚が一匹近寄ってきた。深く考えずに俺は水に手を浸け、素早く上げた。
「お兄ちゃんやったね！」
「ああ……案外すんなり取れるもんだ」
　掬った水の中で、小魚が暴れまわっている。そっと川に戻してやると、慌てるように岩の隙間へと逃げ込んでいった。
「家族のもとに帰ったのかな？」
「さあ、どうだろうね」
「……、私たちも４５姉のとこに戻ろ？」
　９が川からあがろうとしたときだった。踏ん張るために足に乗せた岩には、苔が大量にくっついていた。
「あっ」
　気の抜けた声をあげながら、９の身体が傾いた。

「あっぶねぇ！」
　腰を両手でがっしりつかんで、転ぶ前になんとか支える。
「大丈夫!?怪我はない!?」
「うん！ありがと！」
　手足をぶらぶらさせながら、９は笑ってくれた。無事なようだ。
「イタッ」
「ん？」
「なんか足が痛い……」
「ちょっとみせてごらん」
　川岸の大きな岩に座らせて、足を見せてもらう。転びこそしなかったもののすべった際に擦りむいたのだろう。血が滲んでいた。
「ちょっと待っててね」
「うん……」
　シャツを破いてペットボトルの水を染み込ませる。その切れ端で傷口を拭くと、しみるのか痛そうな声を上げる。
「大丈夫。ただの擦り傷だ」
「お兄ちゃんごめんなさい」

「謝る必要なんてないさ。さてと……」
擦り傷ではあるけれど、範囲が広い。荷物に入れておいた絆創膏は小さすぎる。
俺はシャツをさらに破って、傷口を抑えるように結びつけた。
「これでよし。帰ったらちゃんと消毒しようね」
「うん！ありがとう！」
歩きづらいだろうからと9の前にしゃがみ込むと、すぐに意図を察してくれて背中にのしかかってくる。
「おんぶだー！」
「あまり動くと落ちちゃうよ」
「やだやだ！落とさないで～！」
少しオーバーリアクションをしながらがっしりと捕まってくる。
怪我の痛みは忘れてくれたようだ。
「9……？」
「おんぶ……」
「……お兄さん？」
荷物のところへ戻った時に、なんというか複雑そうな表情で迎え入れられたのは、何故だろうか。

第２５話　寿司食いてえ

これは川遊びから数日後のある晩の話……

あっ、なんかすごく寿司食べたい。
「というわけで寿司を食べに行こうと思う」
「どういうわけなの……」
チビたちが眠ったあと、俺とＧ１１ちゃんで出かける場所の相談をしていた。
何故寿司を食べたくなったかって？それは寿司を食べたくなったからだよ。
「回転寿司とか？」
「いや……回らないほうがいいな。せっかくの夏なんだから」
「そう……それじゃあ」
そう言ってＧ１１ちゃんは一つの市場のサイトを開く。
「こんなとこあるんだけど、どう？」
そこは、プラスチックのパックに自分の好きなお寿司を取っていって会計するという、これまた珍しい場所だった。

「う～ん、控えめに言って最高じゃないか！」
「あわわ、お兄さん急に抱きつかないで！」
「よし行こう！明日行こう！すぐ行こう！」
「あわわわわ」
ちょっと強く抱きつきすぎたのか、Ｇ１ちゃんがぐるぐると目を回しながら顔を赤らめているけど関係ない。喜べ、明日は寿司だ。
その後、このテンションのままめちゃくちゃスケジュールを決めて、そのまま泥のように眠った。お酒にプラスで深夜テンションまでかかると何をしでかすかわからないものだ。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

「うぉぉ、想像以上だな」
電車とバスを乗り継いで来た先は、意外と大きな建物だった。海のすぐ側だからか濃厚な潮の香りが辺りを包んでいる。
「よし、じゃあ行こうか」
「うん！」

　想定通り人が多い。はぐれないようにＧ１１ちゃんと分担しながら、中へと入る。随分と広い空間のはずだが、店と人混みのせいで随分と狭く感じる。
「おっと９ちゃん、少し待って」
　辺りを見回して、ちょうど空中廊下のようになった二階部分を指差す。
「他のみんなも。まずははぐれないこと。そしてもしはぐれたらあそこの柱で待つこと。わかった？」
「は～い！」
　迷子案内という便利なものはあっても、念の為の決め事だけは大切だ。といっても、いつものごとく危うく蹴りそうなくらい近くから離れない４５ちゃんと９ちゃんははぐれそうにないけれど。それに４１６ちゃんは今日も今日とてＧ１１ちゃんと手をつないでいる。
「それじゃ、いざ出陣」
「おー！」
　９ちゃんの元気な返事とともに、俺たちは市場の中へと繰り出していった。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

人混みの中は、思った以上に通りづらかった。せっかく取った寿司を落とさぬようにしながら、会計を済ませる。
「9ちゃん、それは？」
「えっと……軍艦巻き！」
「ずいぶんとたくさんの種類があったもんだねぇ……」
9ちゃんの持つ器には、軍艦巻きものが所狭しと並んでいる。いくらやうに、それに海苔ではなくサーモン自体でシャリを包んだものまである。
「お兄ちゃんは……なにそれ？」
「これ？うなぎだよ。今年の夏はまだ食べてなかったなと思ってね」
「そっちじゃなくてこっち」
どうやら9ちゃんにはバレバレだったようだ。
「ビール？」
「まあそうとも言う……。でもノンアルコールだからさ！」
「いいんだけど、あとで私たちもなにか飲みたいなー」
「わかったわかった。外に自販機もあったし皆でなにか買おうか」
「やったー！」
「そういえば45ちゃんは？」

「４５姉ならあっちの店に行ってるよ」
　９ちゃんの指差す方向を見れば、うさぎのポーチからお金を取り出している４５ちゃんがいた。そしてお金を出した後、店員さんにペコリと礼をしてからこちらに戻ってきた。
「何を買ったの？」
「えっと……これ」
　そういって４５ちゃんが手に持つビニール袋を広げる。その器は俺たちのような四角いものではなく、円形だ。
「ほう、海鮮丼とはいいチョイスだね」
「その……お店の人がすごくおすすめしてて美味しそうだったから」
　ちらりと店の方を見ると、他店には負けないくらい声を張り上げて客を呼び込んでいる。こういった店と店との距離が狭いからこそ、こうも呼び込みの声が収まらないのだろう。
「お兄さんもいい買い物をしたみたい」
「ははは、４５ちゃんもお見通しか」
　４５ちゃんはコツンと俺のポケットの中の缶を叩いて、それからいつものように服を掴む。

「Ｇ１１ちゃんたちと合流しなきゃね」
「その必要はないよ」
「っと、もう来てたんだね」
「まあね。私はあまり食べないし、４１６ちゃんもすぐに決めて買ってたよ」
２人とも悩むと思っていたが、速攻で決めてきたようだ。
「ちなみに何を買ったんだい？」
「私はおすすめされたのを」
Ｇ１１ちゃんの器には、人気ランキングの上から数個が並んでいる。
「私は美味しそうだったのを……」
４１６ちゃんの分は、これまたわかりやすく、値段が高かったものが並んでいる。多少量が多い気もするが、あまり表に出てないだけではしゃいでいるのかもしれない。
「よし、じゃあ食べる場所を探そうか」
といっても、この人混みだ。そうそうに席が見つかるわけがなかった。
「どこも埋まってるなぁ」
ただでさえ席が限られているのに、俺たちが5人もいるということもあって全然見つからない。
「あお兄ちゃん！あっちなんてどうかな！」

「ん？」

９ちゃんの指差す方向を見れば、それは市場の外だった。海に伸びたデッキの上の植え込みが、ちょうどベンチ代わりになっている。

その一角が、ちょうど日陰になっており、なおかつ空いている。

「よし、じゃああそこにしようか」

さて、念願の寿司、実食と行こうじゃないか。

第２６話　泳ぐ寿司

豪華な寿司と、それを入れる質素な器。自販機で買った緑茶に、青空の下。また特徴的な状況で俺たちは座り込んでいた。日陰の場所を確保できたからか、そこまで暑さも気にならない。

「おいしい～！」

９ちゃんが頬を膨らませながら、お寿司を夢中になって食べている。他の３人も、口にこそでないが顔をほころばせながら箸を動かし続けている。

カシュッ

銀色に光る缶を、勢いよく開ける。辛口な喉越しが寿司を運ぶ手を助ける。旨い。回転寿司なんかでは考えられないくらいの暴力的な大きさのネタが、舌を蹂躙してくる。

「くーっ、たまらないね」

「お兄さん、随分と楽しそうだね」

「食べたいときに食べたいものを食べる。これ以上に楽しいことがあるかい？」

「こんなにテンションが高いお兄さん初めて見た……」

Ｇ１１ちゃんが何かつぶやくが、気にせずに次の寿司へと箸をのばす。意外と多めに

買ったつもりだったが、あっという間に器を空にしてしまった。
「ねえお兄ちゃん」
「なんだい、９ちゃん」
「私、おかわりしたい」
「偶然だねぇ、俺もだ」
くいくい、と服の裾を引っ張られる。その引っ張ってきた４５ちゃんの方を見れば、どうやら彼女もまた、物足りなかったようだ。４１６ちゃんやＧ１１ちゃんも同様。となればとる選択肢は一つだ。
「よし！じゃあもう一回、買いに行こうか！」
そういって俺たちは、再び市場へと舞い戻った。

＝＊＝＊＝＊＝

第二陣を終えた俺たちは、膨れた腹をさすりながら近くの神社を観光してみることにした。食後の運動にはちょうどいい距離だった。
「えっと……お兄さん」
「ん？なんだい４５ちゃん」

「これ……」
　そういって４５ちゃんは、ウサギのポーチから単行本のようなものを取り出す。
「ああ、御朱印か。いいよ、行こうか」
　４５ちゃんはコクリとうなずいて、それから俺の手を握って受付のほうへと引っ張っていく。４５ちゃんがこうやって引っ張るなんて珍しい。
「あっ４５姉！私も！」
　そういって空いているもう片方の手を９ちゃんが掴んでくる。またもや両手に姉妹を装備した俺は、犬に引きずられるソリのように引きずられかけながら受付へと向かうことになった。
「ねえお兄ちゃん、見てみて！」
　４５ちゃんが受付の人に御朱印帳を渡している間、９ちゃんがすぐ側のお守りコーナーを指差す。
「これは……フグの形をしたお守り？珍しいね」
「なんだか有名なんだって。ねえ買ってもいい？」
「いいよ。どうせだから皆の分も買おうか」
　ちょうど５種類あるようだ。色と、それから効果も違うらしい。
「お兄ちゃん、おみくじもあるよ！」

「いいね、４５ちゃんが帰ってきたら皆で引こうか」
このあとむちゃくちゃおみくじを引いた。結果？そっと閉じて結んだとだけ……。

＝＊＝＊＝＊＝

「このあと、どうしようか」
昼の混雑を避けるために早めに到着したため、まだティータイムにも早いくらいだった。帰りの電車を調べていると、Ｇ１１ちゃんが袖を引っ張ってくる。
「お兄さん、あそこ見て」
「ん？水族館か」
どうやら、市場のすぐ側に水族館があるらしい。
「でも最近行っただろう？」
「でも水族館ごとに展示は違うし、何より……」
「気温が上がってきて暑いんだね……」
Ｇ１１ちゃんはコクリとうなずいた。
「どう？皆は水族館いきたい？」
「私は行きたい！」

「9が言うなら私も……」
「皆が行くなら」
まあ大体想定通りの言葉だ。確かに日差しが辛くなってきたころだ。涼しいであろう水族館で時間を潰すのはいい案かもしれない。
「よし、じゃあ行ってみようか」
いつも先に調べていくから、こうやって事前情報無しは初めてだ。なんとなくわくわくしてきた。
「楽しそうだねお兄ちゃん！」
「まあね。ほら、早く行こう！」

＝＊＝＊＝＊＝

水族館の中は、案の定冷房が聞いていた。水音や壁の視覚効果も相まって、涼むには最適な空間である。
「っと、団体客もいるのか。はぐれないようにね」
「は～い！」
近くの幼稚園か何かの団体客とかぶってしまったらしい。小さい子どもがたくさん

いる。はぐれないように、４５ちゃんと９ちゃんに、必ず２人で行動するように口を酸っぱく言い聞かせる。

２人は仲良く手をつなぎながら、キョロキョロとしながら歩いていく。俺も少し後ろを歩きながら、張り巡らされた水槽に目を向ける。

水族館一つ一つでコンセプトが違う。前に行ったところは自然を使用した展示がメインだったが、今回の水族館はいくつもの中規模な水槽で魅せるタイプだ。一つ一つの水槽に入っている魚が少ないので、じっくりと魚の種類が見やすい。

だがしかし……立地上の問題が一つ。

「なあなあ、俺がおかしいのかな」

たまたま隣にいた大学生くらいの男が、彼のとなりの友達に話しかけている。

「泳いでる魚、旨そうに見えるんだ」

そう、市場のすぐ隣という性質上、俺たちの他にも寿司を食べたあとにここにきた客が多いのだ。先程まで口に運んでいた旨い魚が元気に泳いでいる姿を眺めるのは、すこし正気度が削れそうな状況な気がした。

第27話　ありがとう

メインとなっているらしい大きな水槽の前には、数組分のソファが設置されていた。
水槽に釘付けな子どもたちを見守りながら、俺はソファに腰掛ける。落ち着いてみると縦にも横にも大きな水槽だ。
「ふう……」
館内は快適そのもので、薄暗いのもあってくつろいでいると寝てしまいそうだ。
「お兄さん」
「Ｇ１１ちゃんも休憩？」
Ｇ１１ちゃんも俺の隣に腰掛ける。
「疲れちゃったので」
ペットボトルを開けながらそういうＧ１１ちゃんも、どうやら若干眠たいらしい。
「このまま……」
水槽とそれから子どもたちを眺めていると、Ｇ１１ちゃんが突然ポツリとつぶやいた。
「このまま？」

「あっいや……その、このままずっと続けばいいのになって」
「俺もそう思うよ」
本心だった。親元を離れて一人暮らしだった。そんな人肌離れた夏休みを過ごしていたのだ。だから皆といろいろなところに出かけるこの日々は、俺にとっても続いてほしいものだった。
しかし、何事にも終わりというものが存在する。夏休みというものは終わるものなのだ。
「また、皆でいろんなとこに行きたいな」
「そうだね」
同意の声を聞きながら、俺はソファから立ち上がった。荷物を持ち直して子どもたちの方に戻る。
「あっお兄ちゃん！先に行ってもいい？」
まだ水槽に食いついている４５ちゃんと４１６ちゃんと違い、９ちゃんは先に進みたいようだった。何か目当てのものがあるようでもあった。
「待って、俺も行くよ」
先に行こうと手を引く９ちゃんをなだめつつ、Ｇ１１ちゃんに目配せする。どうやら伝わったようで、肩をすくめつつも了承してくれた。

「それで、９ちゃんは何を見たいの？」
「えっバレてた？」
そりゃもちろん。４５ちゃんのことを置いて自分だけ先に行こうとするあたりがいつもと違う。
「えっとね……これ！」
そういってパンフレットを開き指差したのは……
「ああ、そういうことか」
水生生物とのふれあいコーナーだった。

＝＊＝＊＝＊＝

なるほど９ちゃんが２人を呼ばないわけだ。
「うわぁ！ぷよぷよしてるー！」
ヒトデだとかそんな触れ合える動物を、とったどーと言わんばかりに持ち上げているのは天真爛漫な笑みを浮かべた９ちゃんである。
「見てみてお兄ちゃん」
「ん、なんだい？」

「かめ！」
甲羅をガッシリと掴まれた亀は、ジタバタと手足を動かしていた。
「かわいそうだから離してやりなさい」
「はーい」
亀を置いてから、９ちゃんは手を洗いに行く。しかしその手についた匂いはとれなかったらしく、確認するかのように何度も自分の手の匂いを嗅いでいた。
「もう満足したのかい？」
「うん。４５姉たちと合流しよ！」
今回は手をつないでこようとしないまま、４５ちゃんの方へと走っていこうとする。
「走ると危ないよ！」
「はーい」
ピタッと足を止めて、それから急かすように早く早くとぴょこぴょことしている。
「よし、行こうか」
「……、うん！」
追いついた俺は手を差し出す。９ちゃんはしばらく悩んだ後、その手を握り返してきた。
大丈夫。変な匂いがうつったら洗えばいいだけさ。

なお、そのあとに合流した3人から距離をとられたのは解せぬ。
「それよりほら、あっちにイルカがいるんだってよ！」
「イルカ!?」
「あっちあっち！早く行こ、４５姉！」
「あっふたりとも待って～」
Ｇ１１ちゃんが９ちゃんと４５ちゃんを追いかけていく中、俺の服の裾を掴んだ４１６ちゃんがくいくいと引っ張ってくる。
「どうしたんだい、４１６ちゃん」
「えっと、その」
なんとなく言葉を決めかねているようだった。
「楽しかったかい？」
４１６ちゃんは無言で、コクリとうなずいた。
「また、どこかに行こうか」
また、コクリとうなずいた。
「優しいのね」
「言われなれてるよ」
お世辞としてが大半だけどな。

「また、水族館にいける？」
「今度はいつ行けるかな」
「……」
「冬休み……は俺が厳しいかもな。春なら時間がいっぱいあるんだけど……４１６ちゃんたちの学校がどうかな」
「……」
「まあ、俺は時間が有り余ってるから、普通の土日でも行けるかもね」
　だから……
「だからそんな悲しそうにするんじゃないよ」
「そう……ね」
　俺は少しうつむいている４１６ちゃんを撫でようとして、自分の手が磯臭かったことに気がつく。しばらく迷ったがしかし、抵抗する様子もないので俺は頭を撫でた。目を細めて静かに撫でられる様子はまるで猫だ。
「よし、皆に追いつかなきゃ」
「……っこ」
「ん？なんだい？」
「だっこ……」

「……」
「ダメならいい」
「わかったわかった！ほら、おんぶでいいかい!?」
４１６ちゃんがこういうことを言うのが珍しすぎて、ついつい固まってしまった。しゃがんでやると、すぐに後ろに回って、背中に小さな体重を感じる。
「……ありがと」
「どういたしまして」
それだけいうと、４１６ちゃんは静かになった。どうやら、寝てしまったらしい。
「お疲れ様、いつもありがとう」
いつも家事をしてくれる小さな彼女に、俺も感謝の言葉を返した。

第２８話　早めのおやすみ

背中で寝てしまっていた４１６ちゃんも、イルカのショーが始まる前には起きて、全員で見ることができた。

いつものように、９ちゃんははしゃぎながら、４５ちゃんは黙ったまま食い入るように、４１６ちゃんは冷静そうで興味津々にイルカのショーを見ていた。

終わったのは、すっかり日暮れの時刻。海辺にある水族館が、夕焼けで赤く染まっていた。

「ねえお兄ちゃん見て！記念パネルだって！」

よくある写真スポットである。場所の名前と日付、それから顔をはめるパネルとがポツンと置かれている。

「写真撮ろ！ね？」

９ちゃんの一言で写真を撮ることにした。写真を撮ってくれそうな親切な人を探しつつ、俺はスマホをスリープモードから解除する。

「っと……マジか」

「どうしたんですか、お兄さん」

「いや、充電切れだ」
もう随分と酷使してきたから、寿命なのかもしれないな。とりあえずＧ１１ちゃんので撮ってもらってから、後で送ってもらおう。
「お兄ちゃん！撮ってくれるって～！」
「わかった。今行く」
スマホをポケットにしまって、パネルの方へと行く。顔をいれる穴には、身長の問題で俺と、それから本人の熱い要望で９ちゃんがつくことにした。
「行きますよー。はい、チーズ」
パシャリとカメラの音がする。夕日の位置のせいで俺だけ変な写りになったが、これはこれで面白いのでヨシとする。
「じゃあ、帰ろっか」
「うん！」
元気なのは９ちゃんくらいで、あとは少し眠そうな顔をしていた。無理もない。朝からこれだけ動いて、美味しいものをたらふく食べたんだ。帰りは少し遠くからタクシーで帰ろうと思いつつ、電車の時間を調べようとしてスマホを取り出す。
「お兄さん？」
「あ、そうだった」

４１６ちゃんに変な目で見られながらスマホをしまう。
「Ｇ１１ちゃん、電車の時間調べてくれないかな。俺のスマホは今はただの文鎮だからさ」
「う……うん。えっと……ここをこうやって……えっと」
「違う、貸して」
「ああ４１６ちゃん」
「ここをこう……そしてこう。ほら」
「ありがとう。お兄さん、えっと次は３分後」
「うんうん、なるほどな」
３分後、３分後かぁ……。駅まで歩いて行って３分……
「無理だね。さらに次で」
「次はそのさらに１５分後」
「ちなみにその次は？」
「夜までだいたい１５分間隔であるみたい」
「よし、じゃあのんびりして行ってもいいな。せっかくだし、お土産なんかどうだい？」
「えっいいの！」
「まあ、なかなかここまで来ないからね」

「やったぁ！４５姉！早く選ぼ！」
「９、もう引っ張らないで。ついて行くから」
「ああもう……待ってよ二人とも～」
二人を追いかけてＧ１１ちゃんが行ってしまい、その場にぽつんと４１６ちゃんと残されてしまった。
「４１６ちゃんは行かなくていいのかい？」
「私はもう……これがあるから」
そう言って見せてくれたのは、４１６ちゃんのスマホに映る先程の写真だ。
「いつのまに送ってもらったの……？」
「さっき、お姉さんのスマホを借りた時」
とんでもない早技である。
しかしせっかく皆がお土産を選んでいるんだし、このままではもったいない。
「じゃあ、家に帰ってから皆で食べるお菓子を買わないか？」
「……うん、わかったわ」
子供なんだからもう少し我儘を言ってもいいのにと思いながら、俺はその後の買い物中に４１６ちゃんが目を奪われていたスノードームをカゴに入れた。

＝＊＝＊＝＊＝

「ただいま～！」
「ふう、ようやく帰ってこれたな」
　地味に時間がかかるので、夜中に帰ってきたとはいえ仮眠はバッチリである。
「お兄ちゃん！ゲームしよ、ゲーム！」
「まあ待て待て。まずは風呂に入ってからにしよう」
　仮眠は取ったと言えど、目に見えない所に疲労は溜まっているものだ。十中八九寝落ちするだろう。というか俺でも怪しい。
「あっ私、着替えとってくる」
「私も」
　Ｇ１１ちゃんと４１６ちゃんはそれぞれの部屋に帰っていく。
「じゃあ先にお風呂はいってくるね。行こ、４５姉！」
「うん。あ、お兄さんは入ってきちゃダメだよ？」
「入らねえよ」
　三人も入ったら湯船が溢れるわ。
「冗談だよ」

「言われなくてもわかっとるわい！」

クスクスと笑いやがって。４５ちゃんの今後の成長が心配である。

さて、無事風呂に行った二人のことは置いておいて、とりあえず遠出の後片付けをしよう。おっとそういえばスマホの充電が切れているんだった。

俺は布団脇の充電コードを引っ張ってきてつなぐ。画面がつくまでは少し時間がかかりそうだ。

ああ、魔力に抗えない。この少しの時間だけでも横になりたいという欲が抑えきれようか。いや、抑えきれるわけがない！

寝転がった俺の意識が途切れるまで、それほど時間はかからなかった。

第２９話　知らないもの

夢を見ていた。
あったかい、幸せな夢だ。
思えば、随分と冷たくて寂しいところにいた気がする。
沈んでいく。明るい陽の光が届く水面から、どんどんと深く冷たい底へと沈んでいく。
違う、沈んでいっているのではなくて、戻っているのだ。元いた場所へ。
沈む感覚に反して、意識は浮上していく。だんだんと手足の感覚が戻ってきて、音が聞こえてくる。

＝＊＝＊＝＊＝

「……！先生！」
「奇跡みたいだ」
目覚めて最初に聞こえてきたのは、聞き覚えのない声だった。

「親御さんに連絡を」
「はい！」
若い女性の声でそう返事が聞こえる。いまいち現状がつかめない。
ゆっくりと目を開けば、眩しい光と共に白い天井が視界に映る。保健室かと思ったが、もう高校は卒業したんだった。
「ここは……いったい」
体を少し起こして見回せば、なるほど納得、病院の個室だった。
「あんた起きたんね！」
「母さん!?」
ぱちぱちと瞬きをしていれば、母親が病室に駆け込んでくる。
「良かった……本当に……」
「いったい何が……」
もういつぶりだかわからない母親の体温に、なんだか安堵感を覚える。
「覚えとらんと？」
「うん……これっぽっちも」
医者の方を向けば、ふむと顎をさすっている。
「記憶障害でしょう。事故のショックを忘れようとする自発的なものなのでじきに治る

かと」
「いや待って、事故？」
　いつの間に俺は事故にあったんだ？
「あんたが旅行から帰るときの電車よ」
　ああそうだ。たしかに俺は寿司が食べたくなって一人で遠くまで出かけて……
　そう、一人で帰っている途中に……

「ごめん、やっぱ上手く思い出せないわ」
「急がんでよかと。ゆっくり落ち着いたら思い出せばよかだけやけん」
「ああ……。そういえば今日は何日？」
「４月１日」
　４月……？でも最後に記憶があるのは俺の夏休みの最後……つまり９月だ。
「つまりは俺って半年近く寝てたわけ？」
　そんなことを言うと、母親は渋い顔をした。
「今は２０ｏｘ年よ」
「……はい？」

なんだ。とどのつまりは事故に遭って数年植物状態でしたってか？
ああ、くそっ！何か引っかかるのに思い出せねえ。
「ってことは大学とかは」
「もちろん退学してるわ」
「デスヨネー」
やっべ。てことは俺、職なし学なしニートまっしぐらか。あーちくしょう、このまま入院していたくなったぜ。

このあとめちゃくちゃリハビリさせられて即退院した。

＝＊＝＊＝＊＝

数年後、何の因果か知らないが俺は元バイト先に拾われるようにして入社し、なんだかんだで社会人生活を満喫していた。
なんともまあ人手不足なもので、数年で支店長まで上り詰めてしまった俺は、今日も閑古鳥のなく店内を監視カメラで眺めつつ頬杖をついていた。
「すみませーん、郵便です」

「あいよー」
玄関の方から声が聞こえた。
珍しい。いや、郵便が来ること自体は珍しく無いのだが、今日は配達員が女性だ。いつもはチャラい感じの若い男なのに。
「ここにハンコをお願いしまーす」
「あっ事務所に置いてきちまった。サインでいいかな」
「もちろんでーす」
どこかで聞いたことあるような気がすると思いながら、俺は書類にサインする。
「ん？荷物は？」
よくよく見てみれば、配達員の女の子は書類の留まったバインダーを持つのみである。
「荷物？私の目の前にあるわ」
「は？」
次の瞬間、目の前から大きな音がする。それは４ＷＤの大型車のエンジン音に近い。
まさかと思ったが最後、何も無いと思っていた空間から車が現れる。噂に聞いていた光学迷彩をこの目で見られて感動である。
「さて、抵抗しないでもらいたいんだけど」

そう言って、目の前の少女はその大きなジャケットの下から銃を取り出す。
ＵＭＰシリーズ、ストレートマガジン、サイレンサーのおまけ付き。
「来てくれるよね、お兄さん？」
「……、まったく。たまには旅に出るのもいいかな」
俺は渋々と車に乗り込む。車の中では、これまたどこかで見たことがあるかも知れない顔ぶれが揃っていた。
「騙されやすい癖はどうにかしたほうがいいかもね、お兄ちゃん」
「肝に銘じておくよ」
車が走り出す。目的地は、俺は知らない。知らないけど、たまにはサプライズ旅行もいい気分転換になるだろう。俺は代わりに叱られるであろうエリアマネージャーにだけ詫びメールを送り、その携帯を投げ捨てた。

この日、街のデータバンクから一人の男のデータが消えた。彼もまた、存在しない人物へと変わってしまった。
しかしこの世の中でそんな些細な事件に注目する人などいない。

第３０話　特別編　まったく……

「おーっし、じゃあ2時間後まで頼むぜ」
「ああ、上手くやれよ?」
　俺はそう言って男友達と別れる。今日はサークルの活動日だが、それ以上に価値がある日だ。なんと、俺の大親友が今日告るらしい。そのセットアップをすべく、今日まで準備してきた。あとは二人きりにしていい雰囲気になったところで親友が突貫するのみである。
「後輩どもは少し離れたスポットに行ってるみたいだし、俺はどうするかな」
　ふらふらと表通りを歩いていれば、ふと目に止まるものがあった。
「ここは……喫茶店か?」
　古めかしくも和洋の入り混じった外装は、まるで大正ロマンとでも言うかのように俺の目を惹きつけてやまなかった。直感的に、この店に何かがあるように感じる。
　カランカラン
「いらっしゃいませ」
　その喫茶店に入った瞬間。俺の人生は色づき始めた。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

「少し休憩が長いんじゃないか？」
「うーん、といってもお客さんいないしなぁ」
「まあ、確かにそうだがな」
我らがバイトリーダーのダネル先輩は、そう言いながらも掃除の手を止めることはなかった。かく言う俺は焙煎機のメンテナンスである。手が豆臭くて敵わん。
こうして二人で働いているのもわけがある。といっても、俺とダネル先輩がバイト中で、店主は買い出し中なだけである。
ダネル先輩はその長い髪を高い位置でポニーテールにしており、先ほどから目の端にチラチラと入っては俺の目を惹きつけている。
「どうだ、直せそうか？」
「うわっ！急に近づくなよ」
あービックリした。何というか距離感バグってないですかパイセン。突然すぐ近くに顔が来たから思わず後ろに倒れるところだった。くそっ顔がいいなちくしょう。

ああそうだ、正直に言おう。俺はダネル先輩に惚れている。一目惚れ二目惚れ何回見てもドキッとする。わざわざ遠いここまでバイトしに来ているのも、そのためだ。
「ところで次の休みはいつからなんだ？」
「えっと、テストが来週で終わりかな」
「……なるほど」
　まさか一緒に出かけたりなんて……
　と考えた俺がバカであった。
「じゃあ来週からはさらにシフトが増やせるな」
「えぇ……。先輩はどうなんですか」
「同じ学年なんだから先輩はやめてくれと言っているだろう」
「いやー癖になっちまってね」
「はぁ、まあいい。私もシフトを増やすさ。君が来ないならその分さらに多く――」
「来ます」
「えっ」
「同じぐらい頑張ってシフト入ります」
「あ、あぁわかった。随分とやる気があるんだな。欲しいものでもあるのか」
　さすがにここであなたの心ですだなんて返す度胸はなかった。

＝＊＝＊＝＊＝

「おい、最近付き合い悪いじゃねえか」
「ん、ああすまん。バイトで疲れててな」
「ったく大丈夫かよ」
　最後のテストを終えた俺は、無事リア充の仲間入りをした親友に絡まれていた。
「ま、たまには呑みに行こうぜ。実はな……合コンの誘いが来てんだ」
「なん……だと……？」
「ククク、聞いたところによると今日はバイトはないんだろ？息抜きだよ息抜き」
「待て、お前彼女はどうする気だ？」
「なに、心配するな。彼女も参加予定だ」
「す、既にできているカップルを合コンに……まさか首謀者は！」
「ああ、俺と彼女を体の良い人数合わせに使おうとしてやがる」
「なるほど、お前が俺を誘った理由がわかったぜ」
「ククク、俺はサポートにしか回れねえけどよ。お前ならぶち壊せる筈だ」
「ああ、任せろ。必ずや討ち取ってみせる」

俺と親友は固い握手をし、数時間後に待ち合わせ場所で再会することを誓ったのであった。

計画は破綻した。繰り返す。計画は破綻した。

俺たちの浅はかな目論見は看破されており、合コンの首謀者は必殺技を早々に繰り出してきやがった。

「王様ゲーム！」

「ちくしょうやってやらぁ！」

引いたくじは３番、親友に合図を送るも首を横に振られる。ちっ王様は外したか。

「じゃあ３番の人が１番の人に『愛してる』って１０回言うで」

定番の王様ゲーム。それは仕組まれた罠だった。まるで決定事項かのように初手で王を引いた首謀者は、俺を狙い撃ちしてきた。

「３番は……俺だ……」

頼む。せめて相手は男だったり冗談が通じるような女子であってくれ……

「１番は……私だな」

そう言って１番と書かれたくじを上げたのは、室内というのに帽子すら取らない子

だった。
「……ちょっとタイムで」
　俺は絶望の最中にいる親友を招集する。
「今日は同じ学部の奴のみじゃねえのか？相手の子、知らねえんだけど」
「あぁ。いつも目立たないところに座ってる子だよ。ほら、最初の授業とかで帽子を取りなさいとか怒られてた」
「うーん、そんな奴がいた気がしなくもないな……」
「とにかく今は耐えるしかねえ。やられんじゃねえぞ」
「もしもの時は……」
「骨くらいは拾ってやるさ」
　そして俺は戦地へと赴くのであった。
「よし、じゃあ行くぞ」
「あ、ああわかった」
　俺は唾を飲み込む。覚悟は決めた。相手は帽子を深くかぶったままだし、目を合わせてすむのは不幸中の幸いだろう。
「すぅぅぅはぁぁぁぁ……愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる！はい！１０回！」

シーンと静まり返った室内。頼む何か助け舟をと思った親友は白目を剥いて使い物にならない。万事休すか……

「その……なんだ、照れるな」

目線も合わせてくれないその子は、そう言って目線を下げたまま俺から距離をとる。すっと、音もなく、一番離れた席へ。

あぁ……終わっちまったぜ俺の青春……。

その後は、本当に何事もなく、そして熱烈な告白をした（させられた）俺は皆から距離を置かれつつ、合コンはエンドロールを迎えた。

お持ち帰りコースやタクシー直帰を決める者たちの中で、俺と親友はトボトボと歩いて帰るのであった。負け犬はクールに去るぜ。泣く気力すらもなくしてな。

＝＊＝＊＝＊＝

「てなことがあったんだよ。ったくこれだから大学生は」

「自分も大学生だろうに」

先日のことをダネル先輩に話してみれば、呆れたと言わんばかりにため息をつかれる。

「しかしなんだ、いい親友を持ったな」
「……紹介しないぞ？彼女持ちだし」
「いやそういうことじゃないさ。ただ仲が良い同級生がいるのが羨ましくてな」
意外だ。きっとこんなに美人な先輩のことだから、友達もたくさんいるものだと思っていた。
「意外だと思っているみたいだな」
「顔に出てたか？」
「ああ、ハッキリとな」
ポーカーフェイスには自身があるんだけどなぁ。
「まあ、面倒ごとになりかねないからな。普段はあまり人と関わらないようにしている」
「じゃあ先輩にとって俺は特別な存在なわけだ」
「ふふ、そういう言い方をされては誤解されてしまうぞ」
そうクスクスと笑う先輩の顔は、今まで見たことがないくらいに可愛らしかった。
「もし誤解されてもいいと言ったら？」
「ははっそれは……さすがに照れてしまうな」
そんなことを言うものだから、その後のバイトに身が入らなかった俺をどうか許してほしい。

＝＊＝＊＝＊＝＊＝

バイトの帰り道。先輩よりも早く店を出た俺は急いで来た道を戻っていた。どうやら定期券を落としたようなのだ。ついでにあわよくば、先輩の帰り道に突き合わせてもらおうという魂胆である。いや、定期券を落としたのは本当に故意じゃないんだがな？

しかし、目の前の障害物Ａ及びＢによって俺の足は止まった。いや、止めざるを得なかった。

「おいおいそこの姉ちゃん」

「暇？今から呑みに行くんだけどさ？一緒にどうよ」

障害物Ａ及びＢが女の子の行手を遮っていたのである。なんともまあ迷惑な行為だが、問題はそこではない。普段は俺も無視するようなわりと日常茶飯事な出来事である。しかし、今回は相手が相手だった。

「いや、困るのだが」

相手は、合コンで俺が熱烈な言葉を繰り返したあの女子であった。今回も深く帽子をかぶって、服装も夜の闇に溶け込んでしまいそうである。

ったく、仕方ねえか。見ちまったもんはもんだし。

「すまん、待たせて。おらなんだおめえら。人の彼女にたかんな」
二人組ナンパやろうがしつこくなくて助かった。去り際に舌打ちをしたくらいである。一発二発くらいはくらう覚悟をしていたので正直ほっとしている。
「はあ。あんたも気をつけろよ。目立たない格好で夜道を一人なんてさ」
「ああ、ありがとう。助かったよ」
「ったく。今日は厄日かな」
定期はなくすし、変な現場に居合わせちゃうし。
「ああそう言えば」
女の子はそういってかばんをゴソゴソとする。
「これ、忘れて帰っていただろう？」
なんとまあ驚くことに、かばんから出てきたのは俺の定期券ケースだった。
「なっこれをどこで？」
「いや、普通に店だが」
「店……？」
今日はバイト先にまっすぐ向かったからどこの店にも立ち寄っていないはずだが……
「ああ、なるほどな。まさかとは思ったが」

そういってその帽子を脱ぐ。まとめられて収まっていた長い髪が、ぶわりと広がる。
「まさか私だって気がついてなかったのか」
帽子の少女は、ダネル先輩だった。
「えっあっ……はっ？えっ？」
「まったく。普通気がつくだろう。格好は違っても声は一緒だぞ」
腕を組みながらダネル先輩は言葉を続ける。
「それに君とシフトが合致したり長期休みが同じ日程だったり、気がつく要素はたくさんあっただろう」
「あっえっ……？」
「まったく、君の目は節穴か？」
ぐいっと寄ってくるダネル先輩に、思わず後ずさりをする。
やばい、すごい恥ずかしくなってきた。つまり俺はダネル先輩にむかってアイシテルだなんて連呼したわけだ。うわぁマジか。
「どうした。帰らないのか？」
「あ、えっと、その……」
「まったく。そこまで動揺しなくてもいいだろう」
「いやぁ……そうそう！俺用事思い出したんで帰りますね！定期券ありがとう！」

そういって定期券を奪い取ろうとすると、ヒョイと避けられる。
「いや、あのぉ……ダネル先輩？」
「なに、君曰く私は夜道を一人で歩かないほうがいいんだろう？」
「うぐっ……」
「ほら、電車の時間もあるしそろそろ駅に向かわないか？」
「……ハイ」
俺に拒否権は、初めから無かったのだ。

＝＊＝＊＝＊＝

「ねぇダネルちゃん」
「彼氏、どうやって落としたの？」
「よくあんな鉄壁を落としたよねぇ～」
普段はあまり喋らない私だが、少なからず交友というものは存在する。そんな数少ない友人たちが、昼休みに私を取り囲む。
「彼ってばいくらアピールしても避けるし」
「男友達は多いのに女に対しては絶対一歩引いてるよね」

私がいなくても会話が成立しそうだなと気配を消して逃げようとするが、ガシリと腕を掴まれる。
「おーっと逃げようとしたって無駄よ？」
「私でなく彼に聞いたらどうだ？」
売るような真似をしてすまないと思いつつ、彼に後を託して私は離脱することにする。
「あらあらあら、彼氏を売るような真似が許されると思いまして？」
そういってポイッと無造作に投げ捨てられたのは、彼の衣服だった。
「彼なら今、男子たちに拷問を受けている最中ですわ」
「なん……だと……？」
「観念することね」
まったく、こんな風に面倒に巻き込まれるから嫌だったんだと思いながら、私は質問という名目の拷問を受けたのであった。